福岡女子大学文学部紀要
「文藝と思想」175～223頁
第67号　2003年2月

「魂」の旅
── 人間はどこから来て、どこへ行くのか ──

中村　弘

はじめに

筆者 ― 本日は、わざわざお出でいただきまして、有難うございます。(中略) さっそくですが、これまで様々な分野の方に拙論を見てもらったのですが、あまり反応がなく、かねて残念に思っておりました。そこで今回は、その中のA氏（文系の女性）とB氏（理系の男性）に参加していただいて、ご意見や質問をうかがいながら論を進めたいと、かように考えた次第です。昔のよしみ（高校の同級生）で、一つよろしくお願いします。

B氏 ― 何を言ってもいいと言うので引き受けたけど、文系のこういう話は、本当は苦手なのですがね。

筆者 ― 私としては、このようなことがすべての人の共通の話題になればと、かねて願っていたのです。何故ならば、これまで繰り返し申し上げてきたように、間もなく地球が「新しい地球」に生まれ変わるために、「目を覚まして」いただく必要があるからです。さもないと、「地球」に残れませんので。ただ、「マザー」の容体は想像以上に悪く、もはや一刻の猶予もなりませんが。

A氏 ― この「『魂』の旅」というテーマは、ランボオとは、どのような関連があるのですか。

1　ランボオの霊魂観

筆者 ― それは今から二十年ほど前のことですが、ある論の中で、ランボオの「地獄時代」(*Une Saison en enfer*) の…

A氏 ― ちょっとお待ち下さい。この作品は、日本ではすべて「地獄の季節」と訳されていると思いますが。なぜ「季節」が「時代」になるのですか。

筆者 ― (少し苦笑いして) それは、これまで何度か説明したつもりですが、私の好みで幾分簡潔すぎたかも知れません。もう少し詳しく言いますと、彼はこの《saison》(季節) という言葉を、有名な *O Saisons, O châteaux* (「ああ季節よ、城よ」) を始めとして、他でも何度か用いています。そして、それは「時、時期、時代」などを表わしているのですが、これは何も特別な用法ではなく、どの辞書にも出ている普通の意味なのですね。例えば、「ロベール」(仏語辞典) では、《Période particulière (de la vie)》:「(人生の) 個々の時期」とあります。「リトレ」(仏語辞典) では更に限定して、《une saison》は、《La première saison de la vie, la jeunesse》:「人生の最初の季節、青春時代」とあります。従って、《Une Saison en enfer》は「地獄の青春時代」であり、そこから「地獄時代」になりました。今度は私から逆にうかがいたいのですが、これまで日本語の「地獄の季節」は、どういう意味だと思っておられましたか。

B氏 ― そう言われてみると、「地獄の季節」だと、地獄にも季節があるみたいだ。

A氏 ― あるいは、「地獄のような季節」かと思いますが、確かに何かはっきりしませんね。

筆者 ― では次に、ランボオの青春がなぜ「地獄の青春時代」であったのか、それをもう一度説明しましょう。彼は一八七一年五月の、いわゆる「予見者の手紙」で、おのれの詩人としての「使命」(人類の先頭に立って、人々を導くこと) に目ざめて、こう言いました。《Il est chargé de l'humanité, des *animaux* même》:「彼 (詩人) は、人類を背負っているのです。さらには、動物までも。」当時十六歳だった彼は、それ故その後の十七から十八の二年間、人類の進むべき道を求めて、「闇」の中を死にもの狂いで突き進んだのです。しかし、職につくことを潔しとしなかったために、青春のさ中に食べるものもろくに食べず、心身ともに限界に達して、ついに行き詰まってしまいました。その時、自分の「地獄のような暗闇の青春」を清算するために、この作品を書いて、命をかけた天職の「詩人」を廃業にしたのです。ランボオ、まだ十九歳になる前のことでした。

A氏 ― 一般には、ラコスト説 (筆蹟鑑定によって、「イリュミナシヨン」は「地獄時代」の後に書かれたとするもの) がほぼ定説となっているようですが、これには以前から反論されていますね。

筆者 ― いわゆる「イリュミナシヨン問題」は、私には既に解決ずみのことですから、もはや興味がないというか、本当は最初から興味がなかったのです。そんな有りえないことは、一瞬たりとも考えたことがありませんでしたか

ら。しかしながら、関心のある方のために、一言だけ言っておきましょう。そもそも、彼の「地獄時代」とは、「イリュミナシヨン」を書いていた時そのものを指しているのです。彼はその時、「闇」の中にあって、自分自身が夜空に光る「星」の存在になったのです。それを、「地獄時代」の中で回想して、《je vécus, étincelle d'or de la lumière *nature*》(*Alchimie du verbe*)：「自然の光の、金色の煌（きらめき）となりて、われ生きぬ」(「言葉の錬金術」) と表現しました。つまり、闇夜に輝く「イリュミナシヨン」(イリュミネーション) とは、そのような自分自身の存在を言ったものに外なりません。それ故、当の「イリュミナシヨン」の中で、《J'ai tendu des cordes de clocher à crocher ; des guirlandes de fenêtre à fenêtre ; des chaînes d'or d'étoile à étoile, et je danse》(*Phrases*)：「鐘楼から鐘楼へ、われ綱を張りたり。また窓から窓へ花づなを。また星から星へ金の鎖をかけて、われは舞うなり」(「小楽節」) と語ったのであって、この宇宙への意識の拡大が、「星」になるということなのです。この「舞うわれ」が、宇宙の舞台で踊る「輝くスター」であるのは明らかでしょう。そして、この現在形の「われ舞うなり」が、先の「われ生きぬ」の過去形になったのは、改めて申し上げるまでもありません。

なお、「地獄時代」には、「イリュミナシヨン」の内容を更に具体的に、直接語った箇所が幾つかあります。その上、「私は『イリュミナシヨン』を書きました」という、いかにもランボオらしい「自白」まで見つけることができました。これらのことは、L' Interprétation des *Illuminations* IIIなどに書いておきましたので、興味のある方はご覧になって下さい (「文芸と思想」、1979年第43号)。要するに問題は、多くの人が珍説奇説を競い合って、彼自身の話を辛抱づよく聞く人が誰もいなかったという、単にそれだけのことだったのです。

A氏 — この問題には興味がないとおっしゃいましたが、それでは何故、そこまで解決しようとされたのですか。

筆者 — それは人々の余りに無節操な言説に憤りを感じたからですが、その人たちの心の反映でしかないことが分かったので、今はもう怒りはありません。しかしながら、ランボオに対する誤解には信じがたいものがありますから、本人が生まれ変わって自分で説明しても、全く理解してもらえないのではないか。以前はそのような思いが強く、あまり期待していませんでしたが、いまや人間の意識全体が急速に変わりつつあります。そろそろ、分かる人が出てくるかも知れませんね。

大分わき道にそれましたが、ランボオと今回のテーマの関連に戻りますと、「地獄時代」の最終章「訣別」の冒頭で、《L' Automne déjà! —— Mais pour-

quoi regretter un éternel soleil, si nous sommes engagés à la découverte de la clarté divine, — loin des gens qui meurent sur les saisons》：「はや秋か。さあれ、永遠の太陽を何故に惜しまんや。われらは季節（時代）と共に死す人々から離れ、神の光の発見を決意したる身なれば」と、今の自分に戻って、改めて感慨を深くしています。ここの「われら」が例の「二人のランボオ」、つまり彼とその守護神である「魂」を指すことは、これまでの論からして明らかでしょう。彼は、この作品を一八七三年の四月に書き始めましたが、途中で中断して、主に七月と八月に書いています。そして八月末に書き終えた時、フランス北東部の彼の故郷では、「すでに秋」でした。しかしながら、この「暑かった夏」は、彼が「地獄の業火で焼かれた時」、つまり狭い意味での「地獄の季節」でもあって、この人生の「夏」を通り過ぎた時に、彼は「すでに人生の秋」を迎えていたのです。それ故の、「さあれ、永遠の太陽を何故に惜しまんや」なのでした。いつも申し上げていることですが、このように意味が二重、三重になるのがランボオの最大の特徴なのです。難解とされる所以でしょう。

そこで、最初のご質問の答えですが、二十年ほど前の論文でここを取りあげて、《Rimbaud croyait certes soit comme chrétien ou non à l'immortalité de l'âme》（ランボオは、キリスト教徒であろうとなかろうと、確かに霊魂の不滅を信じていたのである）、とコメントしました（Rimbaud ou Hermaphrodite spirituel,「文芸と思想」, 1982年46号）。彼はそればかりか、別の章では、《A chaque être, plusieurs *autres* vies me semblaient dues》：「われは人間一人ひとり、幾つかの他生の定まれるものと思いたりき」と、明確に「輪廻転生説」を述べています。その上、自分の身の回りの人たちの転生も具体的に語っており、更に別の章では、歴史上の自分の過去生まで語っています。このような「霊魂の不滅」と「輪廻転生」こそが、この詩人の言動の基盤となる根本思想であることを念頭において下さい。実は、東洋では常識的なこのような考えも、ヨーロッパのキリスト教国では極めて異例のものなのです。また彼は、見かけに反して、一種の聖者でもありました。そして私は、このような詩人に対する世人の無理解に、これまで何度か疑問を呈してきました。しかし、クリスチャンであれ無神論者であれ、その根底には、彼のこのような考えや姿勢に対する違和感から、不信感や反発があるのではないか。かように思い至り、改めてこの問題をきちんと論じる必要を感じた次第なのです。従って今回は、ランボオそのものよりも、その前提となる、このような根本思想を中心に見ていくことになるでしょう。

B氏 — こう言っては何ですが、これまでの論文でおっしゃっていることは、

難しくてどうもよく分からない。それが大方の、正直な感想じゃないかと思いますがね。もう少し、何とかなりませんか。

A氏 ― 確かに、ランボオはフランス文学の中でも一番難解とされていますから、非常に扱いにくい対象であることはよく分かります。でも逆に言えば、それだからこそ、できるだけ易しく説明していただく必要があるのではないでしょうか。

筆者 ― 分かりました。今回は特別の「対話篇」ということですから、私に分かる範囲でお答えしましょう。どうぞ、何なりとお聞きになって下さい。

B氏 ― では、先ず最初にうかがいたいのですがね、ずばり言って、「魂」とは何ですか。

筆者 ― 正直に言って、そのようなご質問が一番答えにくいのですよ。もちろん、古来おおぜいの人が「魂」を語っていますが、実に様々な見解が述べられていて、明確な定義は難しい。と、先ずは申し上げておきましょう。しかしながら、これが人間にとって、最も根本的な問題であることには変わりありません。従って、今ここで一言で答えるのではなく、順を追って、様々な角度から見ていくことにしましょう。先ず、その前段階と言える、「死」について考察しなければなりません。一般に、「死」に対して目をそむける人が、「魂」の存在を否定するのです。

2　タナトロギー（死学）

筆者 ― この問題にオーソドックスに取り組むためには、誰か適当な人にガイドしてもらった方がよいでしょう。幸い、ギリシャ・ローマの古典に精通していて、様々な死生観や霊魂説を論じている人に、モンテーニュがいます。

B氏 ― （小声でA氏に）それはモンテスキューのことじゃないの。

A氏 ― ええ。二人とも教科書に出てくる有名な人ですが、モンテスキュー（Montesquieu）の方は「法の精神」（*De l'esprit des lois*）の、いわゆる「三権分立」によって知られた、十八世紀フランスの啓蒙思想家です。一方、モンテーニュ（Montaigne）は十六世紀のフランスのユマニスト（人文主義者）で、その著「エセー（随想録）」（*Les Essais*）によってモラリスト（人生論者）の祖とされていますが、日本ではまだそれほど知られていないようですね（と言って筆者の顔を見る）。

筆者 ― ええ。とは言え、現代フランスの一流の作家や文学者の中には、モンテーニュの「エセー」を「わが聖書」と呼んで、最高に評価する人たちもいるのですよ。

B氏 ― その辺が、われわれからすると、今ひとつよく分からないのですがね。自然科学では新しい論文が出ると、それ以前のデータは古くなって、もはや価値がなくなる訳ですよ。

筆者 ― 確かに、そこは大きく違う所ですね。要するに、目に見えないものを対象とする文系の分野では、昔の人の方が直観が働いたのです。そのため、今の人たちよりも、はるかに洞察力がありました。それ故、現代のある哲学者は、「哲学の歴史はプラトンの脚注にすぎない」とまで言ったのです。

B氏 ― いくら文系でも、そんな馬鹿なことはないでしょ。それとも、進歩がないとでも言うのですか。

筆者 ― これは議論しても切りがありません。巨視的には、すべてが既に言われており、微視的には、一人ひとりがすべて違った考え方をしているということです。その一例をあげましょう。「エセー」の中に「子供の教育について」という一章（全三巻中の第一巻第二十六章）がありますが、私の知る限り、最高の教育論と言えるでしょう。関心のある方は、ぜひご覧になって下さい。そうすれば、私の言うことが納得していただけると思いますから。これが、「エセー」の訳本です。

B氏 ― (手に取りながら) つかぬことを聞きますが、「エセー」とは、随筆の「エッセイ」と違うのですか。

筆者 ― モンテーニュは、この分野のいわば元祖で、後にイギリスに伝わって「エッセイ文学」と呼ばれるジャンルに発展したのですが、これを日本では「随筆」と訳しました。元は動詞《essayer》(試験する、試みる) の名詞形《essai》(試験、試み) で、ラテン語の《exigere》(重さを量る) から来ています。そこから「試作」や「試論」の意味が派生して、更に《Se dit de certains ouvrages que l'auteur intitule ainsi par modestie》(Littré)：「作者が謙遜してそのように題した、ある種の作品について言う」(リトレ) ようになりました。モンテーニュの人柄からみて、「エセー」がこの意味であるのは明らかでしょう。

では本論に入りますが、今の「子供の教育について」の少し前に、「哲学をすることは、死に慣れること」(*Que philosopher, c'est apprendre à mourir*) と題された章（第二十章）があって、それはこのように始まります。《Cicero dit que Philosopher ce n'est autre chose que s'aprester à la mort. C'est d'autant que l'estude et la contemplation retirent aucunement nostre ame hors de nous, et l'embesongnent à part du corps, qui est quelque aprentissage et ressemblance de la mort ; ou bien, c'est que toute la sagesse et discours du monde se resoult en fin à ce point, de nous apprendre à ne

craindre point à mourir》(Garnier)：「キケロ（紀元前一世紀のローマの代表的政治家で文筆家。その文章は古典ラテン語の範とされる ― 筆者注）は、『哲学をすること』は、死の準備をすることに外ならぬと言った。（哲学の ― 筆者補足）研究と瞑想は、人の魂（霊魂）を決して（体の ― 補足）外に引き出さず、しかも魂（精神）に体から離れて仕事をさせるからであり、それは何らかの死の見習いで、死に類似しているのである。あるいは、世間の知恵や論説は結局すべて、人に死を少しも恐れぬことを教えるという、この一点に帰着するからである。」この「『哲学をすること』は、死の準備をすることに外ならぬ」とか、題名の「哲学をすることは、死に慣れること」は、実はプラトンの「パイドン」で、くり返し言われたことなのです。そして…

B氏 ― あの、ですね。今の、「魂」が出るとか出ないとか、離れるというのは、何のことですか。

筆者 ― 今それを説明しようとしていたのですが、要するに問題は、人間は何かということですね。これは、誰でも知っているように二つの考え方があって、物質主義（matérialisme）では、人間は肉体という物質で、精神はその一機能と考えますが、精神主義（spiritualisme）では、「魂」ないし「精神」は物質とは別個の、上位の存在と考える訳です。そして、この精神主義の考え方を分かりやすく説明する時に、「魂」は肉体という「衣」をまとっているとか、肉体は「魂」が乗る「船」であるという比喩が用いられるのですが、見えないものを表現するには他に方法がありませんから、これは止むを得ません。そこで今のご質問ですが、端的に言いますと、「魂（霊魂）」が体の外に出るとは死ぬということで、「魂（精神）」が体から離れて仕事をするとは、体が休んでいても「魂」は活動するということです。このように、《âme》（魂）には「霊魂」と「精神」の意味がありますが、それはまた後ほどご説明しましょう。

モンテーニュはその後で、様々な人の死に方や死生観について、古典からの引用を挿入しながら論じていますが、その中で自分自身についても、次のように打ち明けました。《Je suis de moy-mesme non melancholique, mais songe-creux. Il n'est rien dequoy je me soye dès toujours plus entretenu que des imaginations de la mort》：「私は生まれつき陰気な質ではないが、空想好きである。常日頃、死の想像ほど私が思い耽ったものはない。」そしてまた、《aussi ay-je pris en coustume d'avoir, non seulement en l'imagination, mais continuellement la mort en la bouche ; et n'est rien dequoy je m'informe si volontiers, que de la mort des hommes ; quelle parole, quel visage, quelle contenance ils y ont eu ; ny endroit des histoires, que je remarque si

attentivement》：「従って（昔の人は死に慣れ親しむように努めたので ― 筆者注)、私は死を想像するだけでなく絶えず口にすることを習慣にしたし、人間の死ほど私が進んで調べたものは外にない。つまり、人が死ぬ時にどんな言葉を口にし、どんな顔をし、どんな態度をとったかである。また、歴史書を見る時に、私がこれほど注意ぶかく注目する個所も外にない」とも。つまり、モンテーニュの最大の関心事は、疑いもなく「死」であったのです。

それは何故でしょうか。再び彼の話を聞きましょう。《Ils vont, ils viennent, ils trottent, ils dansent, de mort nulles nouvelles. Tout cela est beau. Mais aussi quand elle arrive, ou à eux, ou à leurs femmes, enfans et amis, les surprenant en dessoude et à découvert, quels tourmens, quels cris, quelle rage, et quel desespoir les acable ?》：「人々は、死の知らせがない時は、行ったり来たり、動き回ったり、踊ったりしている。それは皆、結構なことである。しかしそれでも、死が不意に彼らの所か、あるいは妻や子供や友人たちの所へやって来て、身を守る術もなく襲われる時は、何という苦しみと、叫びと、怒りと、絶望に圧倒されることか。」それは万人の経験ですが、問題は、これにどう対応するかです。《Si c'estoit ennemy qui se peut eviter, je conseillerois d'emprunter les armes de la coüardise. Mais puis qu'il ne se peut, puis qu'il vous attrape fuyant et poltron aussi bien qu'honeste homme, et que nulle trampe de cuirasse vous couvre, aprenons à le soutenir de pied ferme, et à le combattre》：「もしそれ（死）が避け得る敵であるならば、私も、臆病が持つ武器を借り受けるよう勧めもしよう。ところが、それはあり得ないのであって、逃げる臆病者も立派な人物も区別なく捕らえるし、またどんな糸で織った鎧胴着を着ても身を守れないのだから、足をふんばって、この敵の攻撃に耐えて戦うことを学ぼうではないか」(古典の引用文は省略)。つまり、モンテーニュは先ず「エピクロス派」として、「死」を人間の最大の敵とみなして、次いで「ストア派」として、これに備えることを勧めたのでした。結局のところ、《La premeditation de la mort est premeditation de la liberté. Qui a appris à mourir, il a desapris à servir. Le sçavoir mourir nous afranchit de toute subjection et contrainte. Il n'y a rien de mal en la vie pour celuy qui a bien compris que la privation de la vie n'est pas mal》：「死を深く考えることは、即ち自由を深く考えることである。死を学んだ者は、奴隷の身を忘却したのである。死ねることは、人をあらゆる予駁法（あらかじめ答えを予想して論破するやり方 ― 筆者注）や拘束から解放する。命を失うのは悪いことではないのをよく理解した者には、人生に悪いことは何もない」のです。

A氏—「予駁法」というのは始めて聞きましたが、フランス語の《subjection》も見たことがありませんね。

筆者—ええ。この《subjection》は珍しい言葉で、大きな辞書にしか載っていません。簡単に言えば、《Figure de pensée qui consiste à interroger l'adversaire et à supposer sa réponse》(Littré)：「相手を尋問し、その返答を予想するための思考法（論法)」ですが、これだけでは分かりにくいかも知れませんね。モンテーニュは、三十八歳で引退するまで、ボルドー高等法院の裁判官でした。その後も、当時は「宗教戦争」の嵐が吹き荒れた動乱の時で、各地の高等法院はプロテスタント弾圧の主導権をにぎり、獄舎は人で満ちあふれていたと言います。彼はそれ故、裁判で被告を尋問して判決するための、このような「論法」をよく知っていたと思われます。従って、この言葉はもう一つの「拘束」と対をなしていて、「死」を恐れなければ、そのような「法」の下での「奴隷の身」から解放されて、自由になると言っているのでしょう。彼は「エセー」の各所で、この内乱を憂えています。

かくして、モンテーニュは様々な哲学を学び、特に「ストア哲学」に慣れ親しんだ訳です。その結果、《Je me desnoue par tout ; mes adieux sont à demi prins de chacun, sauf de moy. Jamais homme ne se prepara à quitter le monde plus purement et pleinement, et ne s'en desprint plus universellement que je m'attens de faire》：「私はすべての柵（しがらみ）から解き放たれている。私の別れの挨拶は、私自身を除いて、すべての人に半ば聞き入れてもらっているのだ。誰ひとりとして、私以上に申し分なく完全に世を去る準備をした者はいないし、また私が覚悟した以上に、あまねく世を捨てた者もいない」、と言えるまでになりました。なお、この頃のモンテーニュは既に老年に達しており、以前のような、いわば肩に力の入りすぎた考え方を反省して、かなり自然体を取るようになったことも付け加えておきましょう。

B氏—それにしても、これは特殊なケースじゃないですかね。普通は、それほど気にしないと思うけど。

筆者—実は、モンテーニュ自身が、正にそう言っているのですよ。《Qu'import'il, me direz-vous, comment que ce soit, pourveu qu'on ne s'en donne point de peine ? Je suis de cet avis》：「それ（死）がどのようなものであれ、わざわざ苦にしなければ、それで構わないではないか、と人は言うかも知れない。私もそう思う」と。しかし、そうはいかないのであると言ってから、先ほどのような話になった次第なのです。念のために申しそえますと、モンテーニュは、生来の「エピキュリアン」(快楽主義者）であって、彼は「ストア派」との、この両極端の間でうまくバランスをとった希有の人物でした。

また、それ故にこそ、すべての人の模範となり得たのです。そのような彼の達した結論が、《chaque homme porte la forme entière de l'humaine condition》：「人間の一人ひとりには、人間特有の有様の、すべての形態がある」(第三巻第二章「後悔について」) でした。それは分かりやすく言えば、「一人の人間の中には、すべての人間が入っている」ということに外なりません。

以上のように、「死」は昔から人類にとって最大の脅威でした。そこで、その「死」から目をそらさず、正面から取り組もうとする勇敢な人たちによって、「タナトロギー」(死学) という学問 (ギリシャ語の「死」thanatos と、「学」-logie から) が生まれました。そして今、世界でその第一人者とされているのが、E・キューブラー・ロス博士なのですが、その著「死ぬ瞬間――死にゆく人々との対話」(川口正吉訳) をご覧になったことがありますか。

A氏 ― 確か、アメリカの女性の精神科医でしたよね。この本で世界的に有名になったので、同じ女性として、名前ぐらいは知っていますが。

筆者 ― 元はスイス生まれ (1926年) で、チューリッヒ大学で学位を取っています。そして、後にアメリカのシカゴ大学で精神医学部教授などを勤めた人ですが、この本には、「死」について実に深い洞察が示されていますので、その要点をご紹介しましょう。つまり、二人目の案内人ということです。

ロス博士は第一章と第二章の始めにおいて、総論と結論を述べていますので、最初から順に見ていきましょう。先ず第一章の「死の恐怖について」ですが、「最近の大きな社会変化」の見出しで、近年のたいへんな医学的進歩にもかかわらず、「死の恐怖をもつ人が増えたことは、究極的にはこの社会変化 (医学的進歩にともなう老人人口の増加のこと ― 筆者注) に原因がある」ので、「死と死ぬことの問題を理解し、これに対処することがいっそう必要になってきた」ことが指摘されます。そこで振り返って、「時代をさかのぼり、古い文化と人間を研究するとき、われわれが強く印象づけられるのは、人間にとって、死はつねにいとわしいことであったし、おそらくこれからもずっとそうであろう」と、この問題の不遍性に注目していますが、これは先ほどの、モンテーニュが語っていたことからも明らかでしょう。そして、ここからがロス博士の本領が発揮される所なのですが、「おそらくこれに対する最良の説明は、われわれの無意識が死を認めないからであろう」、と考えるのです。急にそう言われても何のことかよく分からないと思いますので、もう少し、話の続きを聞きましょう。「われわれはすべて、無意識下に、われわれ自身には決して死は起こり得ないとする、基本的知識をもっている」からであり、「われわれの無意識的な心の見るところでは、われわれは殺されてはじめて死ぬのである。自然原因で、もしくは老齢のために死ぬということは、考えられないのであ

る」ということが、「基本的事実」として語られるのです。

B氏 ― 本当ですかね。だいたい、無意識のことが、どうして分かるのですか。

筆者 ― 直接には知ることができませんが、夢とか、催眠とか、精神分析などによって、それを読み取ることができるのです。それは結局、無意識では、「魂の不滅」を知っているということではないでしょうか。

以上が、個人の場合の問題点ですが、次いで、「第二章　死と死ぬことへの態度」の「1　社会変化と自我防衛機制（不安を回避する心理的機制）」で、人間社会における「死」の問題が取りあげられます。「この社会全般に眼をそそげば、社会の中の人間に、死を無視し死との直面を回避しようとする傾向が強くなってきているのが見られる。」もちろん、日本も同じであることは言うまでもありません。

そして、「破壊と死の恐怖の増大」の見出しで、次のように論が展開されて行きます。「昔は男は敵と眼と眼を合わせることができた」が、「いまは違う。兵士のみならず市民が大量破壊兵器を予測しなければならない。」従って、「現代はもはや、男性が自分の権利（や）、信念、家族の安全と名誉などを守るために戦うのではない。女や子どもまでも含めた国民対国民の戦争である。科学と技術の進歩はかくて、破壊への恐怖を増大させ、したがってまた死の恐怖を拡がらせた」のです。「とすれば、人間が以前よりもより強く自己を防衛しなければならなくなったのは驚くに当たらない。肉体的な自己防衛能力がしだいに弱くなった反面、心理的な自己防衛の必要性が急増した。かれ（人間―筆者注）は永久に死の否認を続けていくわけにはいかない」ので、「死を否認できないとすれば、死を克服しようと努めるのは当然だろう。」それは、あたかもモンテーニュを思わせる反応ですが、ここからが決定的に違うのです。

そこで、「街のギャングから国民まで、集団が集団を攻撃し他を殲滅（せんめつ）することによって、殲滅される恐怖を表現する。おそらく戦争というものは、死に直面し、死を克服し、死から逃れて生きるという必要以外のなにものでもないのではないか。われわれ自身の死の否認の特殊な形式ではないのか。」これは、戦争の本質を衝いた、まことに鋭い指摘ではないでしょうか。

B氏 ― しかし、この戦争の定義は一面的で、防衛の場合だけに当てはまるのではないですかね。

筆者 ― ここでの「死」とは、「死」につながる困難な状況を指すものでしょう。例えば、国内に暴動が起るような状況になれば、国の支配者は国民の目を外に向けさせる必要が出てくる訳です。さもなければ、危険な戦争など誰も起さないでしょう。

A氏 ― 私も、そう思います。今の、「街のギャングから国民まで、集団が集団を攻撃し他を殲滅することによって、殲滅される恐怖を表現する」というお話をうかがいながら、最近のテロや、対テロ戦争のことを思い浮べてしまいました。何故そこまでやるのか、何故報復のくり返しに歯止めがかからないのか、本当に不思議でならなかったのですよ。

筆者 ― そこでロス博士は、ここで極めて重大な提言を行うのです。「だから、国民対国民の戦争か平和かを意志決定するリーダーたちの、死に対する態度を研究すれば、平和への道がみつかるかもしれない。もしわれわれすべてが、一生懸命にみずからの死をみつめる努力をし、死の観念をとりまく不安に善処し、他国民にもこれらの思想を理解させるように努めるならば、おそらくわれわれの周囲の破壊を少なくすることができるであろう」と。「死」の問題がどれほど大切なものかお分かりいただけたでしょうか。この論も、勿論そのような努力の一つに他ならないことを隠すつもりはありません。

最後に、博士の「まとめ」を聞きましょう。「以上を要約すれば、急速な技術進歩と新しい科学的成果によって、人間は大量殺戮の新技術と新兵器を開発し、これがすさまじい終末観的な死への恐怖を増大させたといえる。この死の恐怖に対し、また死を予見し自己防衛することの無能力に対し、人はいろいろの仕方で心理的に自己防衛しなければならない。心理的には、しばらくは自己の死という現実を否定することは可能である。われわれは、無意識的には、自分自身の死を認めず、不死を信じる。だが隣人の死は考えることができる。かくて決闘（撃ち合い ― 筆者訳）、戦争、ハイウェイで殺される人々のニュースは、われわれの不死を信じる無意識下の信念を支持するだけである。そして、われわれは無意識の心のひそやかなところで、『となりの人だった、おれではなかった』と喜ぶことさえできるのである。」もしかすると、思い当ることがあるのではないでしょうか。

続けて、「死に直面する能力の低下」の見出しで、目下の状況の難しさが改めて確認されます。「もしも否認がもはや不可能とわかれば、死に挑戦することによってこれを克服しようとする試みがでてくる。」そこで、「われわれは味方の戦死者の十倍の敵を殺した――そう毎日のように新聞で聞かされる。」大本営発表は、日本だけではないのです。何故、そのようなことをするのでしょうか。「これは、われわれの願望的思考ではあるまいか？万能と不死を求める幼児的願望の投射ではあるまいか？」しかしながら、そこから結果するものは、破壊でしかありません。「国民全体あるいは社会全体がこうした死の恐怖に怯え、死の否認を志向しているとすれば、死の恐怖を克服するためには破壊的な自己防衛手段だけにたよらざるを得なくなる。戦争、暴動、さらにまた

殺人その他の犯罪件数の増加などは、われわれの（死に対する ― 補足）受容的心情と威厳とをもって死に直面する能力の低下を物語っているのかもしれない。」従って、私たちは、こう考える必要があるでしょう。「たぶん、われわれは人間個人に立ち戻り、ゼロから出発し直さなければならないかもしれない。そして、自分自身の死を考える努力をし、この悲劇的な、しかし不可避な出来事に、いらだつことなく、恐れることなく直面することを学ばなければならないのではあるまいか。」かくして、ロス博士の結論は、奇しくもモンテーニュと一致することになりました。

そして、博士は最後に、宗教と未来社会の問題を取りあげていますが、先ず「宗教の無力化と未来社会での死」の見出しで、無宗教とその未来に目を向けています。要約しますと、昔は、「苦しみはいまよりももっと一般的であった」が、今は、「痛み、かゆみ、その他の不快感を抑えるために薬剤があるから、苦しむことにはあまり意味がなくなった」ために、「地上での苦しみが天国で報いられるという信仰はとっくに死滅した。」ところが、問題はそれで終りませんでした。「この変化とともに、死後の生（これは、それ自体、死性の否認であるといってよいだろう）をほんとうに信じる人が著しく少なくなった。死後の生を期待できないとすれば、われわれは死を悩まなければならない。」言うまでもなく、それが無神論者のガンであり、希望なく、正に「死に至る病」なのです。「それは、ただわれわれの不安を増し、われわれの破壊性と攻撃性（われわれ自身の死に直面することを回避するために他人を殺す）を強めただけである。」少し前まで、唯物論者（物質主義者）は人類のバラ色の未来を描いてみせましたが、これがその実体なのです。Bさんは多分、反論があるでしょうね。科学者のすべてが唯物論者という訳ではなく、アインシュタインを始めとして、信仰のある人は結構いるのですが。

B氏 ― こいつは先手を取られたか。これが、さっきの「予駁法」ってヤツかな。それはともかくとして、問題は、いずれ科学が解決すると思うけどね。要するに、人間の寿命が延びればいいのだから。

筆者 ― はたして、そうでしょうか。続きを見てみましょう。「未来社会を予想すると、そこでは多くの人々が機械とコンピューターによって“生かされる”ようにな」り、「他（別）の医療センターはますます需要が高まるだろう。そこでは死者はすばやく冷凍されて低温の特別ビルディングに収容され、科学と技術が十分に進歩して死体の冷凍を解く日を待つことになる。」そこで、「社会はすさまじいまでに人口過剰となり、幾人を解凍すべきかを決める委員会が必要となろう。」

A氏 ― ええっ、本当ですか。何か恐ろしい話ですね。

B氏 ― 確かに問題だと思うけど、そこは科学が何とか……

筆者 ― しないと思いますよ。そこでロス博士も、こう言っています。「聞くだに空恐ろしい信じ難い話である。だが悲しいかな、これらすべてが現にいま起こりつつあるのである。この国では、ビジネスに鋭いカンを持つ人々が、死の恐怖を利用して金儲けしようとするのを防止する法律はない。法律は、冷凍数年後の可能的な生の約束を広告し、莫大な価格で売ろうとする機会主義者(ご都合主義の人 ― 筆者訳) のビジネス権利を否認していない。こうした企業はすでに存在している」(原著は1969年に出版された)。それは現代版の「ミイラ」に外なりませんが、本物のミイラ同様、甦ることは絶対にありません。正しく、物質主義社会の成れの果ての姿と言えるでしょう。

ロス博士は、この問題について、次の「偉大なる社会と死」の見出しの中で、こう考えています。先ず、「われわれは過去へもどるわけにもいかない」し、現在は、「大量破壊兵器の存在を否定し得ない。」そして、これからは、「科学と技術の発達はますます多くの重要器官の移植を可能にさせるだろうし、生と死、提供者と受益者というようなむずかしい諸問題は急激に、多岐的に増えていくだろう。」しかし、様々な問題の解決は先のばしにされるので、「未来世代は、生か死かの問題をますます多数、大量に決定しなければならなくなり、ついに生か死の決定は一部コンピューターに委ねざるを得なくなるだろう。」確かに、「だれでもこの問題はいやだ。だれでも、自分は自分なりにこのような難問は先へ先へと未解決のまま延ばしたがる。だが、ついには直面しなければならなくなる。」

そう、もはや、逃げ場はないのです。「こうしてわれわれのすべてが、みずからの死を見詰めはじめれば、多くの事柄に影響を与えることができる。そのうちもっとも重要なのは、われわれ (医者 ― 筆者注) の患者 (の)、われわれの家族 (の)、そして最終的にはおそらく国民の福祉ということである。」そこで、「もし学生に科学技術の価値と並行して人間関係、すなわち人間的で完全な患者ケアの技法と原理を教えることができるならば、それこそ真の進歩である。」このように、先ず根本の「死の恐怖」をなくすことによって、やがて、「科学技術が破壊を増大する目的に誤用されず、生を人間的ならしめるよりは、たんなる延命のために使われるということがなくなれば、そして進歩する科学技術の速度と矛盾することなく、個人的な人間対人間の接触により多くの時間がかけられるようになれば、そのときこそはじめて、われわれは偉大なる社会を口にすることができよう。」

つまり、「こうして最終的には、われわれ自身の死に直面し、これを受容することによって、平和を、自分自身の内的平和のみならず、国民間の平和をも

達成することができるだろう」、というのがロス博士の最終的な結論なのです。それは、モンテーニュの達した「個人の平和」を「人類の平和」にまで拡大しようとするものだと言えるでしょう。なお、ここまでが言わば「前置き」で、以下において様々な末期患者とのインタビューを交えながら、有名な「受容」に至る五段階について、具体的な論が展開されて行きますが、本書の終りの方で、このようなことを言っています。「死とは、死にかかる過程が終る一瞬にすぎない、といったのはたしかモンテーニュであったろうか。」そして、この問題で使命を感じた博士は、その後世界中を講演して回り、「死の伝道者」と呼ばれるようになりました。簡単な紹介でしたが、何か感じる所があった方は、ぜひ直接ご覧になって下さい。

以上からして、「死」の問題は、個人レベルだけでなく、社会の、人類全体の、最も根本的な問題であることがお分かりいただけたでしょうか。それは、目をそらしては解決できないのです。そして、「死」の本当の問題とは、要するに「魂」は存在するのか、ということに外なりません。

3 「魂」の存在

筆者 ― では、ここで再び最初の案内人の、モンテーニュに戻ることにしましょう。彼は初めに見たように、「タナトロギー」の元祖のような人でしたが、その彼が「魂」について本格的に論じたのが、「エセー」第二巻十二章の「レモン・スボン擁護」(*Apologie de Raimond Sebond*) です。この章は何故かあまり注目されていませんが、初版の九十四篇中、これ一つで全体の四分の一を占めており、事実上「エセー」を代表する雄篇と言っても過言ではありません。その中で、彼は先ず「無神論者」の…

A氏 ― すみませんが、その前に、この題名について説明していただけませんか。

筆者 ― これは失礼。この「レモン・スボン」なる人物は、十五世紀のスペインの神学者で哲学者ですが、その著書「自然神学 ― 被造物論」(*Theologia naturalis sive liber creaturarum*) をフランス語に翻訳したのが、実は当のモンテーニュ自身なのでした。そこで彼は、「擁護」の中で先ず、この著者の目的が何かを明らかにしています。《Sa fin est hardie et courageuse, car il entreprend, par raisons humaines et naturelles, establir et verifier contre les atheistes tous les articles de la religion Chrestienne》:「彼(レモン・スボン)の目的は、大胆かつ勇敢である。何故ならば、彼は無神論者に対して、人間的で自然にかなった理由によって、『キリスト教』の信仰箇条のすべてを

定めて、これを立証しようとするからである。」つまり、この書に対する「無神論者」などの攻撃に対して反論を陳述したのが、この「レモン・スボン擁護」なのです。

A氏 ― フランスなどヨーロッパと言えば、キリスト教の伝統が行きわたった所で、国民の殆どがクリスチャンかと思っていましたが、「無神論者」がそれほどいたのですか。

筆者 ― 確かに、少し意外な感じがするでしょうね。中世においては、キリスト教というか、「ローマ・カトリック教会」の組織が絶対的支配権を握っていましたが、その末期にはすでに、人々の心は不安に覆われていて、その不動の支配権も揺らぐようになりました。そしてモンテーニュの頃は、いわゆる「宗教改革」とそれに伴う「宗教戦争」で、ヨーロッパ中が大混乱におちいった時だったのです。そのため、キリスト教徒であっても信仰心の薄い人たちや単純な人たちも多く、モンテーニュは彼らに対する「無神論者」の影響を危惧したようですね。その「無神論者」について、こう切り出しています。《L' Atheisme estant une proposition comme desnaturée et monstrueuse, difficile aussi et malaisée d'establir en l'esprit humain, pour insolent et desreglé qu'il puisse estre ; il s'en est veu assez, par vanité et par fierté de concevoir des opinions non vulgaires et reformatrices du monde, en affecter la profession par contenance, qui, s'ils sont assez fols, ne sont pas assez forts pour l'avoir plantée en leur conscience pourtant》：「『無神論』とは自然に反した奇形のごとき主張であって、またそれを精神（心）の中に確立することは、いかに奔放で傲慢な者であれ容易ではなく、難しいことだ。虚栄心と傲慢さから世直しなどという普通でない考えを抱いて、その立場を冷静に表明しようとする者がかなり見受けられたが、彼らはかなり無分別ではあっても、そのような表明を自分の良心に植えつけてしまうほど頑強な無信仰ではなかったのである。」

B氏 ― また、ずい分古くさいことを言ってるね。昔の人は無知だったから宗教なぞを信じていたけど、今は科学の時代だから、「無神論」でなければ馬鹿にされますよ。

筆者 ― これはまた、今の時代に、大層クラシックなことをおっしゃいますね。そもそも、科学的な知識があるかないかの問題ではないでしょう。事実、「無神論」は現代の専売特許ではなく、ギリシャ・ローマの昔からあったのです。その一方で、現代でも、外国では宗教信仰が当り前なのですよ。いま、世界でどれくらいの信者がいるか、ご存知ですか。全人口がおよそ六十億として、以下も概算ですが、キリスト教徒が二十億（33%）で、イスラム教徒は

十二億（20%）、ヒンズー教徒と仏教徒を会わせると十三億二千万（22%）、そして無宗教者が十億七千万（18%足らず）です。つまり、三人に一人がキリスト教徒で、五人に一人がイスラム教徒、ヒンズー教徒ないし仏教徒も五人に一人強ですが、それに対して無宗教者は五人に一人まで行きません。

しかしながら、モンテーニュが批判するのは、「無神論者」だけではありません。そのほこ先は、自身の敬虔なキリスト教徒の立場から、同じキリスト教徒にも向けられました。《Voyez l'horrible impudence dequoy nous pelotons les raisons divines, et combien irreligieusement nous les avons et rejettées et reprinses selon que la fortune nous a changé de place en ces orages publiques》：「人々が神理（天理）をなでまわす（ように扱う）時の、恐るべき破廉恥さを考えてみよ。また国家のこのような激動のさ中で、人々の立場が運命によって変わるにつれて、どれほど不敬虔にその神理を投げ捨てては、また拾い上げたかも（考えてみよ）。」

B氏 ― 何のことやら、チンプンカンプンだね。

筆者 ― まあ、もう少し辛抱して下さい。すぐ続けて、その具体的な内容が語られていますから。《Cette proposition si solenne : S'il est permis au sujet de se rebeller et armer contre son prince pour la defence de la religion, souvienne-vous en quelles bouches, cette année passée, l'affirmative d'icelle estoit l'arc-boutant d'un parti, la negative de quel autre parti c'estoit l'arc-boutant ; et oyez à present de quel quartier vient la voix et instruction de l'une et de l'autre》：「『臣下は宗教を守るために、主君にそむいて武器をとることができるか否か』の、この大変厳しい命題について、去年は誰がその肯定をある党派の支えとしたか、誰がその否定を別のどの党派の支えとしたかを思い出すことだ。そして今は、その肯定および否定の声と（作戦の）指示が、どの（軍の）宿営地から出ているかを聞くがよい。」

B氏 ― ますます分からないよ。

筆者 ― よく分からない方は、当時の歴史を少し勉強していただく必要がありますが、Aさん、もしご存知でしたら、簡単に説明してくれませんか。

A氏 ― 昔、世界史で習った程度で、ほとんど忘れてしまいましたが、何か大変血なまぐさい時でしたね。カトリーヌ・ド・メディシスが「聖バーソロミュー（サン・バルテルミー）の大虐殺」を起こしたのは、その頃だったかしら。アンリという、同じ名前の王様や指導者が三人いて、その内の二人が次々に暗殺されたりして。そして残ったアンリが国王に即位し、「ナントの勅令」を発布して、めでたしめでたしになったけど、彼もまた暗殺されてしまって……。

筆者 ― どうも有難うございます。大体そんな所ですね。後は私の方で、少しばかり肉付けしましょう。

B氏 ―「ナントの勅令」は、一五九八年だったかな。入試で覚えたけど、何のことかさっぱり分からなかった。

筆者 ― ごく簡単に言いますと、長期にわたる「ローマ・カトリック」の支配から「腐敗」が生じて、そのために内部批判が起きた訳ですが、その代表がルターであり、カルヴァンでした。そして、これらの批判勢力は破門されて、やがて旧教（カトリック）と戦う新教グループ（プロテスタント、ルター派、ユグノー）を結成したのです。ところがフランスでは、これに政治的支配権がからんで、国王や貴族たちの複雑な権力闘争の様相を呈するようになり、そこから「宗教戦争（ユグノー戦争）」（フランスのカルヴァン派の新教徒をユグノーと言う）へと発展して行きました。それは、一五六二年の「ヴァシー事件」（ノルマンディーのヴァシーの改革派教会に集まったプロテスタントを、旧教派の頭目ギーズ公の軍隊が虐殺）から、「ナントの勅令」が発布された一五九八年まで、三十六年間に及んだ内戦であり、全国各地で殺戮がくり返されたのです。その時に、有名な「三アンリ」が登場したのですが、先ず一人目が、旧教を代表するギーズ家の跡とりの「アンリ・ド・ギーズ」（1550―88年）。そして、フランスのプロテスタントの三人の指導者の一人が、フランスの王家カペーの傍系に当るブールボン家のアントワーヌ・ド・ブールボン（ナヴァール王）で、その息子の「アンリ・ド・ナヴァール」が二人目です。やがて、一五七〇年に三回目の和議が成立し、さらに一五七二年に両派の和平を促進するために、このアンリ・ド・ナヴァールと国王シャルル九世の妹の婚姻が取り決められました。そして、その婚礼に参加するために、全国から大勢のプロテスタントの貴族がパリに集まりました。その時、摂政カトリーヌと旧教派は、プロテスタントの総帥コリニー提督の暗殺を謀ります。ところが、これに失敗したため、復讐を恐れたカトリーヌは国王シャルルに、プロテスタントの一斉虐殺を命じます。かくして、「サン・バルテルミー」（祝日）の鐘の音を合図にパリは惨劇の巻と化し、それは更に全国に広まって、死者の数は数万人にも及びました。これが「ユグノー戦争」のクライマックスですが、それから二年後の七四年に、まだ二十三、四の国王シャルルが突然死んだため（罪の呵責のためと言われる）、その弟がアンリ三世として即位します。即ち三人目の「アンリ」の登場ですが、その即位と同時に再び内乱が勃発しました。その後、王位継承をめぐる複雑な情勢の中で、八八年にアンリ三世が旧教のアンリ・ド・ギーズを暗殺します。ところが、翌八九年に、今後は当のアンリ三世が反王権の修道士に刺殺されてしまいます。これによって傍系バロワ朝が断絶したため、もう

一つの傍系ブールボン家のアンリ・ド・ナヴァールが、「アンリ四世」として即位しました。しかし、カトリック大国のフランスの国王は、プロテスタントでは勤まりません。そこで彼は、カトリック派貴族や一般民衆の支持を得るために、一五九三年に自らカトリックに改宗しました。そして九八年には、ユグノー派にも王国内の居住権と信仰の自由を認めた「ナントの勅令」を公布して、これ以後は荒廃した国内が徐々に再建されて行きます。ところが一六一〇年になって、彼もまた狂信的なカトリック教徒に突然襲われ、殺害されてしまいました。しかしながら、アンリ四世は名君として全国民の哀悼を受けて、今でも一番人気の国王です。そのため、子供が小学校へ上がると、まっ先に暗殺者ラヴァイヤック（Ravaillac）の名前を教わるとか。

そこで元に戻って、「臣下は宗教を守るために、主君にそむいて武器をとることができるか否か」ですが、それは以上のような情況（実際はもっと複雑）の中でのことなのです。先ず、文中の「去年」とは一五八九年、即ちアンリ三世が死んで、アンリ・ド・ナヴァールがアンリ四世として即位した年であることを頭に入れて下さい。すると、「去年は誰がその肯定をある党派の支えとしたか」というと、それは八九年までのプロテスタントの貴族であり、それを否定したのが旧教派の貴族であることが分かるでしょう。また八九年以後は、それが逆転したことも、容易に想像がつくのではないでしょうか。モンテーニュ自身は、政治的な野心はまったくなく、終始穏健なカトリックで通しましたが、実はこの国家の一大事に際して、非常に重要な役割を演じていたのです。それは、彼がカトリックであるにもかかわらず、プロテスタントのアンリ・ド・ナヴァールの深い信任を得て、両派の調停役になったからでした。そのため、アンリが隠密裡にモンテーニュの家を訪れて意見を求めたこともあって、やがて彼が国王の座についた時、要職のオファーがあったのですが、モンテーニュらしく、これを丁重に断っています。

元に戻りましょう。その他にも、一般の人々のキリスト教信仰に対する厳しい批判が次々に出てきますが、その中の一つだけを見ておくことにします。《Ces grandes promesses de la béatitude eternelle, si nous les recevions de pareille authorité qu'un disours philosophique, nous n'aurions pas la mort en telle horreur que nous avons》：「永遠の至福（神に選ばれた者が受ける最高の幸福）というこの大いなる約束を、我々が哲学論の一つと同じほどの影響力で受け入れたならば、これほどには死を恐れないであろうに。」モンテーニュは「エセー」の中で、好んでギリシャ・ローマの古典を引用しており、この「哲学論」も、勿論ギリシャ・ローマの哲学を指しています。それに対して、聖書の引用はない訳ではありませんが、比較すれば、はるかに少ないと言わざ

るを得ません。そこから、モンテーニュは完全に「ユマニスト」(人文主義者)であって、「キリスト教徒」は形だけであったと考える人が多いようですが、以上のように、ほんの一部を見ただけでも彼が本物のキリスト教徒であることは明らかです。そのような彼から見れば、たとえキリスト教徒であっても、多くは「異教徒」とあまり変らなかったのかも知れません。では、「エセー」の他の章では、なぜキリスト教をあまり論じていないのか。それは、聖書は別格であって他の書物のように軽々に議論の対象にすべきではない、そのようなことは不敬虔である、と考えたからでしょう。その驚くべき博学にもかかわらず、本当は学問さえも最重要視してはいません。モンテーニュと言えば、その「懐疑主義」によって知られていますが、最後のより所として、キリスト教の「超絶的な神」を信じていたのです。

では、その近よりがたい「神」とは、どのようなものなのでしょうか。《Le neud qui devroit attacher nostre jugement et nostre volonté, qui devroit estreindre nostre ame et joindre à nostre createur, ce devroit estre un nœud prenant ses repliz et ses forces, non pas de noz considerations, de noz raisons et passions, mais d'une estreinte divine et supernaturelle, n'ayant qu'une forme, un visage et un lustre, qui est l'authorité de Dieu et sa grace》:「我々の判断と意志を結びつけているに違いない(絆の)結び目は、我々の魂をとらえて我々の創造者と結びつけているに違いないが、その結び目の輪の形と強さは、我々の理性や感情の意見ではなく神との超自然の絆から得たものに違いなく、その結び目にはただ一つの形と顔と威光しかないが、それが「神」の権威と恩寵なのである。」話が難しくなってきましたが、ここは私たちの「精神」(心)ないし「魂」と、「神」との接点を表現しようとしたものです。何しろ、見えないものについて話しているので、頭で考えても分かりませんから、心の眼で見るようにしましょう。なお、ここは三段論法になっていて、以上が「大前提」であることにご留意下さい。《Or, nostre cœur et nostre ame estant regie et commandée par la foy, c'est raison qu'elle tire au service de son dessain toutes noz autres pieces selon leur portée》:「ところで、我々の心と魂は信仰によって統治され命令されているので、その信仰が自分の意図を実現させるために、我々の他のすべての部品をその能力に応じて使うのは道理にかなっている。」この「我々の他のすべての部品」とは、勿論「心」と「魂」以外の「体」のことを指します。これが「小前提」。《Aussi n'est-il pas croyable que toute cette machine n'ait quelques marques empreintes de la main de ce grand architecte, et qu'il n'y ait quelque image és choses du monde raportant aucunement à l'ouvrier qui les a batis et

formées》：「従って、こう信じることができるのではないか。この機械のすべてには、あの偉大な設計者の手の何らかの刻印があるのであって、この世の物も、それを組み立てて形づくった石工とは少しも関係がないが、そこには何らかの影があるのだと。」これが結論です。前文の「部品」である「この機械」が、「石工」になる訳です。「この世の物」とは、次を見れば分かるように、人間が作った「大教会」（カテドラル）などをイメージすればよいでしょう。以上から、必然的にこう考えることが出来るのではないでしょうか。《Il a laissé en ces hauts ouvrages le caractere de sa divinité, et ne tient qu'à nostre imbecilité que nous ne le puissions descouvrir. C'est ce qu'il nous dit luy mesme, que ses operations invisibles, il nous les manifeste par les visibles》：「彼（神）は、これらの高き建造物にその神性を残したのであって、我々がそれに気づかないのは、ひとえに我々の愚かさが原因である。彼はその見えざる働きを、見えるものによって我々に示しているのであって、これは彼自身が我々に言ったことなのである。」この後半の部分は、次の所で引用されているパウロの言葉を要約したものであることは明らかです。では、何故パウロではなく、「彼（神）自身が言った」と言っているのか。それは、「神」がパウロの口を使って語っているからなのです。聖書は、様々なものが含まれていますが、基本的に「チャネリング情報」と言ってよいでしょう。そのような事柄は、人間の知り得ることではないのですから。《Toute Ecriture est inspiré de Dieu》（Traduction du monde nouveau）：「『聖書』全体が『神』に吹き込まれしものなり」（「テモテへの第二の手紙」三章十六節）。

A氏―その「チャネリング」については、確か前回も少し触れてあったと思いますが、どうしてそのようなことが起こるのですか。

筆者―「チャンネル」は、誰でも知っているように、「回路」ですね。そして、人間の体は、異なる次元からの通信を受信する通信回路、つまり「受信機」なのです。ですから、「チャネリング」とは、そのような「回路」で受信することだとお考え下さい。分かりやすい例をあげれば、ソクラテスはよく「ダイモン」の声が聞こえて、何かをしようとする時に止められたと言っていますが、この「ダイモン」とは「守護神」のことです。従って、「ハイヤー・セルフ」（上位自己）などが良くない行動を制止したということでしょう。また、ジャンヌ・ダルクが「神」ないし「天使」の声を聞いて、あのような行動に出たことはよく知られていますね。二人とも、そのために殺されたようなものですが。

A氏―私はここに、前回いただいた物（「宇宙のワンダラー」、「文芸と思想」64号掲載）を持ってきたのですが、今の「守護神」の所がよく分かりま

せんでした。これによりますと、「ひふみ神示」の中に、「霊的自分を正守護神と申し、神的自分を本守護神と申すぞ。幽界的自分が副守護神ぢゃ。本守護神は大神の歓喜であるぞ」という説明があって、ランボオの場合は、「オフェリア」の守護神である「ハムレット」は「正守護神」であり、この「二人のランボオ」が遂に出会った守護神が、「本守護神」であると書いてあります。そうすると、今の「ハイヤー・セルフ」と、「正守護神」や「本守護神」の関係はどうなるのですか。

筆者 ― ここは特に難しい所なので、もう少し説明がいるかも知れませんね。先の「予見者の手紙」を見れば分かることですが、ランボオは「魂」に目ざめた時に、それまでの自分が気がふれたようになって、「魂」の自分に夢中になって付いて行ったので、それをオフェリアとハムレットの関係で表わしました。これは、「魂」に目ざめた人がどのようになるかを示した、真に巧みな比喩と言うべきでしょう。次に、「魂」は更にその上の自己がいて、それを「ハイヤー・セルフ」（上位自己）と言います。この「ハイヤー・セルフ」のことを、「オーバー・ソウル」（oversoul）とか、「モナド」（ライプニッツの「単子」ではなく、「統一体」の意）とも呼びます。従って、「魂」という「霊的自分」が「正守護神」に当り、更にその上の「オーバー・ソウル」が「本守護神」になる訳ですね。そして、本当は更にその上があって何重にもなっているので、「神示」では、「ご本尊は十二単（ひとえ）を着ているぞ」と言っています。そこから、その論文では、「人間は『多次元的存在』の一部なのです」と申し上げました。普通は、「人間は多次元的な神である」という表現が多いようですが、意味は全く同じです。「上から見ると皆人間ぢゃ。下から見ると皆神ぢゃ」（神示）。

A氏 ― では、ついでにうかがいますが、もう一つの「副守護神」とは何でしょうか。人間は正しくない行為も守護されるので、「末世」とは「副守護神」の活躍する世だということですが。

筆者 ―「霊界」（霊魂の世界）の一番低い所が「幽界」で、そこは犯罪者などの道に外れた想念によって作り出された世界ですから、彼らの「魂」は「幽界的自分」になります。それでも同じ「魂」ですから、肉体的自分を守護することには変りありません。犯罪者はよく、犯行の直前に「ヤレ」という声を聞いたと言っていますが、これが「副守護神」などでしょう。その他、直観や無意識の行動まですべて「チャネリング」であって、実際は誰もが行っていることなのです。なお、今は特別の時なので、数えきれぬほどの「チャネリング情報」が出ていますが、ピンからキリまであって、十分に気をつけねばなりません。

では、モンテーニュの続きです。《Le ciel, la terre, les elemans, nostre corps et nostre ame, toutes choses y conspirent ; il n'est que de trouver le moyen de s'en servir. Elles nous instruisent, si nous sommes capables d'entendre. Car ce monde est un temple tressainct, dedans lequel l'homme est introduict pour y contempler des statues, non ouvrées de mortelle main, mais celles que la divine pensée a faict sensibles : le Soleil, les étoiles, les eaux et la terre, pour nous representer les intelligibles. "Les choses invisibles de Dieu", dit Saint Paul, "apparoissent par la creation du monde, considerant sa sapience eternelle et sa divinité par ses œuvres."》:「天と地、(天候などの) 自然の力、我々の体と魂など、すべての物がそれ (我々の信仰心) に手を差しのべている。それらを使う方法を見つけさえすればよいのだ。我々が聞く耳さえあれば、すべての物が教えてくれる。と言うのは、この世界は神聖きわまる神殿であって、人間はその中に入れてもらっているのだが、それは人間の手で作られた彫像を眺めるのではなく、我々に理解できるものを示すために神の思いが (我々に) 感知できるようにした彫像、即ち太陽や星や海や陸地などを眺めるためである。『神の見えざる実体は、その永遠の英知と神性をその作品によって考察するならば、世界の創造物によって明らかになる』と、聖パウロは言っている。」このパウロの言葉は、「ローマ人への手紙」(第一章二十節) にありますが、「神」の「見えざる手」を説明するものとして、非常に説得力のあるものと言えるでしょう。

B氏 — それは、どうですかね。科学が明らかにしているように、すべては全くの偶然であって、そこに何か意味を見つけようとするのは、先ほども言ったように無知のなせる業でしかなく、「イワシの頭も信心から」ということですよ、アッハッハッ。

筆者 — 同じく、それはどうですかね。この「偶然」と「必然」の問題は以前にも述べたことがありますが、要するに、分からないから「偶然」と言っているに過ぎないのではないでしょうか。実を言えば、私は目が覚めるまでは、とびきりの唯物論者に理想的に育てられた優等生でした。しかし、人間は確かなことは殆ど何も分からないのですから、本当はソクラテスのように、率直に「分からない」と認めるべきでしょう。ところが、多くの人はそうは言わずに、「単なる偶然だ」と言うのですね。何があっても二言目には「偶然だ」のくり返しで、これは無神論者の「念仏」と言ってもよいのではないでしょうか。例えばですね、話を分かりやすくするために、ここに一本のボルトとナットとワッシャー (座金) があるとしましょう。この三つの部品をボール鉢に入れて揺すると、どれくらいの時間で一組の堅く締ったボルトになると思いますか。

恐らく、いくらやってもそのようなことは起こらず、ただ金属粉になるだけでしょう。一方、地球がボール鉢よりもはるかに大きいことは、勿論言うまでもありません。また、人間の体は多数の部品からできていて、六十兆と言われる細胞も、その一つ一つが巨大な化学工場であることが分かってきました。この人体の仕組みは、一組のボルトどころではありませんが、それでも、これは「偶然」に出来たのですか。

B氏 ― それはその…、もちろん「偶然」に決ってるじゃないの。そもそも、人体の構造は、すべて科学が明らかにしたのだから。

筆者 ― 最近はまた、人間のDNAの研究が進んで、人体の無数に近い遺伝情報の入った設計図であることが分かってきました。人間はロボットの設計図は作ることができますが、人間自体の設計図は、人知を越えた者でなくては作れないのではないですか。それとも、これもまた……

B氏 ― そう、当然だよ。「偶然」は何でもできるのだから、不可能と考える方がおかしい。

筆者 ― ハッハッハ。Bさんの「偶然」は、まるで「神」みたいですね。「科学の法則」の「必然」は、偶然に生まれる訳ですか。よく無神論者は、反論を受けると、それならば「神」が存在する証拠として「奇蹟」を見せよと言います。しかし、実際に見れば、必ずそれを否定するでしょう。何故ならば、そのような「奇蹟」を信じないことが、大前提だからです。しかしながら、本当は奇蹟がないことこそが、最大の奇蹟なのですよ。従って、科学者とは、「見えざる者」の業が如何にすばらしいかを、ひたすら証明している人たちに外なりません。しかも、本当の奇蹟である「生命」に関しては、まだ何も分かっていないのです。何しろ、人間はウイルスひとつ作れないのですから。

B氏 ― どうやらCさん（筆者）は、無神論ではないみたいだけど、まさかヤソとか仏（ブツ）とかアラーを拝んでいるのでは……。

筆者 ― 私自身は何教でもありませんが、ある意味では、その全部であると言えるかも知れませんね。前論で紹介した出口王仁三郎も、「万教同根」と言っていますが、すべての人は「大本」（神）でつながっているのですから、「わが宗教に入った者だけが救われる」というのも、おかしな話でしょう。また、「一神教」と「多神教」の問題も、説明の仕方に違いがあるだけで、本来は同じものなのです。しかしながら、中には「宗教」と聞いただけで顔の引きつる人や、戦闘モードに入る人もいますから、もしかすると「ものまね鳥」のような宗教組織の勧誘ではないかと、心配する向きもあるのかも知れません。しかし、私が勧めているのは、そんな小さなことではなく、もっと大それたことなのではありませんか。これからは一人一人がグル（教祖）になり、更に

「神」になる時なのです。この今という、地球始まって以来の「大変革」の時に、今さらそのような古いものに参加しても仕方ないのではないでしょうか。

A氏 ― 人間が、どうして「神」などになれるのですか。

筆者 ― 地をはう「虫」でさえ、羽化して、空を飛ぶのです。人間が、どうして「神」になれないことがあるでしょうか。

B氏 ― 何かよく分からないけど、どの宗教にも入っていないということは、要するにCさんも「無神論」ということじゃないの。始めからそう言えばいいものを、ややこしいことを宣うものだから。確かに、心の中で何を思おうと、その人の勝手だけどね。しかし、それはカニがブクブクと泡を吹くのと同じで、確固たる物を対象とする正統派科学者は、そんな泡（あぶく）は端（はな）から問題にしないから。言っては悪いけど、支配者によってすぐ変る「法」の「学」など、正しく「泡学」そのものじゃないの、アッハッハッ。

筆者 ― モンテーニュが「高等法院」の裁判官であったことをおっしゃっているのかも知れませんが、つまる所、唯一なる正統派学問は「科学教」ということですね。だから、仕える科学者は「白衣」をまとっているのですか。

B氏 ― どういうことかな。

筆者 ― まあ切りがありませんから、この辺にしてモンテーニュに戻りますと、彼が以上で述べたことは、キリスト教徒だけでなく「無神論者」にもそのまま当てはまるために、再びこの一層強力な相手に的をしぼって、本格的な論戦をくり広げて行きます。先ず、スボンに対する彼ら「無神論者」の攻撃に、こう反撃しました。《On couche volontiers le sens des ecris d'autrui à la faveur des opinions qu'on a préjugées en soi ; et un atheïste se flate à ramener tous auteurs à l'atheïsme, infectant de son propre venin la matiere innocente》：「彼ら（無神論者）は自分の中で（勝手に）推測した見方でもって、他人の書いた物の意味を、喜んで（縦から）横向きにする。そこで、ある無神論者は、自分自身の毒で無害な内容を汚染して、すべての著者を無神論に帰着させたと思い込んでいる。」現代のある無神論者は、精神主義のヘーゲル哲学から、都合のよい所を自分の唯物論に取りこんでいますが、モンテーニュは始めから分かっていたみたいですね。

B氏 ― （顔色を変えて）何を言っているんだ。ヘーゲルの方が○○（丸円）を真似したんじゃないか。だいたい「エセー」なぞ、引用だらけで、剽窃のカタマリのくせに。

筆者 ― まあ、落ち着いて下さい。では、もう一つの批判を見てみましょう。こちらは更に厳しいことを言っているので、一段と耳ざわりかも知れませんが、あくまでも「反論」であることをお忘れなく。《Le moyen que je prens

pour rabattre cette frenaisie et qui me semble le plus propre, c'est de froisser et fouler aux pieds l'orgueil et humaine fierté ; leur faire sentir l'inanité, la vanité et deneantise de l'homme ; leur arracher des points les chetives armes de leur raison》：「この精神錯乱を押さえこむために私が取る手段で、一番適切と思われるのは、その思い上がりと人間的誇りを打ちくだいて、踏みつぶすことである。彼らに人間の空しさと、はかなさと、全き無価値を感じさせることである。彼らの論点から、彼らの理性という脆弱な武器を取りあげることである。」それはいかにもキリスト教らしい論法ですが、ここまで来ると、さすがに私も少し言いすぎではないかと思います。何のことかと言いますと、「無神論」とは精神（神）による精神（神）の否定、つまり精神の自己否定なのですが、キリスト教では「唯一の絶対神」を強調するあまり、人間を無に等しいものと考える傾向があって、これもまた逆の、精神による自己否定につながるのではないでしょうか。「神」は「スピリット」（霊）ですが（「ヨハネ伝」、四章二十四節）、人間もまた「スピリット」（霊魂、精神）なのです。人間は本質的に「神」であることがご理解いただけたでしょうか。

しかしながら、モンテーニュは人間の「傲慢さ」（思い上がり）を戒めているのであって、そのために盲目になるのを何よりも恐れているのです。人間が、つい理性は万能であるかのように思いこみがちなのは、今も昔も変りありません。そのような訳で、彼は以下でも人間が如何に愚かであるかを指摘して、この「傲慢さ」と「理性」に気をつけ、「理性」ではなく「神」への信仰を大切にするよう、くり返し説得しています。勿論、ギリシャ・ローマの哲学は理性によるものであって、モンテーニュがその中でピュロンなどの「懐疑主義」だけを良しとする立場に身を置いたのは、以上からして当然と言えるでしょう。最初は、ストア派の力強さに引かれたのですが。

そのような彼が、ギリシャ・ローマの哲学者たちは「霊魂」をどのように考えていたかについて、その様々な説を取りあげながら論じています。先ず「霊魂」も滅びるという説に触れてから、次いで「霊魂不滅説」について、《l'opinion contraire de l'immortalité de l'ame, c'est la partie de l'humaine science traictée avec plus de reservation et de doute》（初版の文章）：「反対の霊魂不滅説は、人間の学問（人文科学）のうちで、更なる留保と疑いをもって取り扱われた分野である」と一層懐疑的ですが、これは意外と言わねばなりません。あれほどの信仰心があれば、当然「霊魂の不滅」を信じているだろうと思われたからです。結局、モンテーニュは様々な人の霊魂不滅説やその反対の説などを挙げてから、《Voylà les belles et certaines instructions que nous tirons de la science humaine sur le subject de nostre ame》：「以上が、

我々の霊魂の問題について、人間の学問（人文科学）から引き出すことのできる、結構で確かな教えである」と、皮肉たっぷりに結びました。

そして彼は、人間の考えが様々であって、確実な認識に達することができない最大の理由として、「感覚」を取り上げています。《toute cognoissance s'achemine en nous par le sens : ce sont nos maistres. La science commence par eux et se resout en eux. Après tout, nous ne sçaurions non plus qu'une pierre, si nous ne sçavions qu'il y a son, odeur, lumiere, saveur, mesure, pois, molesse, durté, aspreté, couleur, polisseure, largeur, profondeur》（引用文省略）：「すべての認識は、感覚によって我々の中へ入ってくる。即ち、感覚は我々の支配者である。学問は感覚から始まり、感覚に帰着する。結局、我々は音や臭いや光や味や大きさや重さや柔らかさや堅さや凹凸や色や滑らかさや幅や深さがあることを知らねば、石ころ同様に何も知らないであろう。」ここだけを見れば、まるで「唯物論」のようです。しかし、無神論者はそこから一歩も出ないのに対して、《ausquels gist le plus grand fondement et preuve de nostre ignorance》：「そこ（感覚）に、我々の無知の最大の根拠と証拠がある」と見抜いたモンテーニュは、そこから更に、この「感覚」を越えた存在である「神」を認めたのでした。そして、《n'y peut-il avoir des principes aux hommes, si la divinité ne les leur a revelez ; de tout le demeurant, et le commencement, et le milieu et la fin, ce n'est que songe et fumée》：「人間にとっての原理原則は、神なる存在によって啓示されなかったならば、あり得ないものだろう。後はすべて、その始めも真ん中も終りも、夢のようなもの、煙のようなものでしかない。」それ故、それは神の「恩寵」（恩恵）であって、「信仰」を得るのもまた「恩寵」ということになるのです。《c'estoit vraiment bien raison que nous fussions tenus à Dieu seul, et au benefice de sa grace, de la verité d'une si nobre creance, puis que de sa seule liberalité nous recevons le fruit de l'immortalité, lequel consiste en la jouyssance de la beatitude eternelle》：「我々（キリスト教徒）が『神』だけにつながれている、そして大変高貴な信用の真理たる恩寵の特典につながれているのは、真にもって正しいことであった。何故ならば、我々はその恩恵だけから不死という果実を得るからであって、それが永遠の至福の享受なのである。」ここの「『神』だけにつながれている」は、「信仰によって」を補って下さい。問題は、その結果の「果実」（成果）である「不死」が、「恩恵」によってだけ与えられるという後半の部分です。それは分かりやすく言えば、「『神』を信ずる良い子には、ごほうびに天国の『永遠の命』を与えよう。だが、言うことを聞かない悪い子には、『永遠の滅び』が待っているだろう」

(「黙示録」の一面的な解釈) ということですが、「神」は人間と違って、そのような「差別」は全くしません。この「天国での永遠の命」がまた何とも奇怪なもので、例の「最後の審判」で無罪になれば、「神さま」は何でも取り出す奇術師よろしく、昔死んだ者にも「永遠の命」を授けてくれるというのです。キリスト教には無数の分派がありますが、殆どが「魂の不滅」と「輪廻」を否定して、このように考えているのではないでしょうか。しかしながら、「命(魂) が輪廻する」のは宇宙の法則であって、誰かが自分勝手に、その「命」(魂) を生かしたり滅ぼしたり出来るものではありません。あえて、それは「神」でもできないと言っておきましょう。何しろ、それは自分の一部なのですから。従って、「霊魂の不滅」と「輪廻転生」の否定は、キリスト教最大の謬見であり、その最大の汚点と言っても過言ではないでしょう。

では、何故そのようなことになったのか。宗教は本来、宇宙の根本原理を教えたもので、昔は世界のどこでも「輪廻転生」が基本の生命観でした。特に一番古い「ヒンズー教」は、正に輪廻教とも言うべき宗教で、本来の正しい教えがかなり残されています。普通の考え方とは逆に、古いほど正しくて、時代が下るにつれて歪曲されて行きました。霊的には、最初が「黄金時代」で、次いで「銀の時代」、更に「銅の時代」、最後に「鉄の時代」となったのは、どなたもよくご存知でしょう。そこで、問題のキリスト教の場合ですが、元のユダヤ教は勿論、キリスト教でも最初は他と同じように、「霊魂は輪廻する」と考えていたのです。例えば、古代キリスト教最大の「教父」(キリスト教を弁護して発展に尽力した人) とされるアウグスチヌス (354—430年) は、「輪廻説」をほぼ認めており (「神の国」など)、「魂の不滅」と題した論文も残されています (「アウグスチヌス著作集2」)。ところが、それから間もなく、ビザンチン皇帝のユスチニアヌス一世 (482—565年) が「第二コンスタンチノポリス公会議」(553年) で、教父たちに「輪廻説」を異端として禁止させたのでした。しかも、それだけではなく、聖書から「輪廻転生」を示す表現を削除させたのです (B・クレーム著「マイトレーヤの使命」など)。その結果、モンテーニュほどの賢者も含めて、現代に至るまで世界中のキリスト教徒を誤らせてきたのですから、まことに罪深いことであったと言わねばなりません。この「輪廻」の否定と「恩寵」による「救済」の教えが、逆に死んだら終りという世の「物質主義」を助長したのは明らかで、実際に現代の聖職者の中には「無神論者」も多く、キリスト教は「無神論」であるという説まで出てくる有様です。西洋の極端な「物質主義」の元凶は、皮肉なことに、キリスト教かも知れません。日本は、残念ながら、その西洋の一員となりました。

4 「魂」の意味

筆者 ― 少し長かったですが、ここまでが言わば「助走」であって、高く遠くへ跳ぶために必要なものでした。これから、いよいよ「ホップ」に入ります。懸案の、「魂」とは何か。結論はすでに出しましたが、今度は「言葉」そのものによって確認しましょう。

A氏 ― これまでの論文でも、言葉や語源からの説明が多かったと記憶しますが、これには何か理由があるのですか。

B氏 ― さっきから言っているように、自然科学の立場からすると、言葉は単なる符号であって、何の実体もないように見えるけどね。違うの。

筆者 ― 例えば、哲学者アランは、*Eléments de philosophie*（「哲学概論」）の序文で、《qu' une analyse directe des mots usuels permet toujours de traiter honorablement n'importe quelle question》：「日常の言語を直接分析することによって、どんな問題も、何時でも立派に論じることができる」とまで、言い切っています。何故そう言えるのか。彼は更にその先の根本的理由を言っていませんが、私は、「言葉」は「言魂」であるが故に、創造の根源につながるからだと思います。言葉は見かけに反して、最も奥深い所に達すると言えるでしょう。

A氏 ― そもそも、自分の「魂」の存在さえ確信できない位ですから、その上さらに「言魂」などと言われても……。

筆者 ― その点は、しばらくお待ち下さい。順を追ってお話しますから。先ず、「魂」を示すフランス語の《âme》は、《principe de vie》（*GRAND LAROUSSE*）：「生命原理」（グラン・ラルース仏語辞典）が基本の意味ですが、《âme》の語源はラテン語の《anima》で、それは《souffle》（Gaffiot, *LATIN FRANÇAIS*）：「息、息吹き、呼気などの吐く息」（ガフィオ羅仏辞典）が本来の意味です。また、これに相当するギリシャ語が《psukhê》（プシュケー）であり、こちらも《souffle ; souffle de la vie》（Bailly, *GREC FRANÇAIS*）：「息、生命の息吹き」（バイイ希仏辞典）と、殆ど変わりありません。ここで肝心の日本語の意味を漢和辞典で見てみると、おおよその所、「魂」は「たましい、人の精神」で、「霊」が「たましい、死者の魂、神」とされていて、この二つは部分的に重複しています。そして、この「霊」を示すフランス語が《esprit》（エスプリ）で、英語のスピリットと同じですが、その語源のラテン語《spiritus》は、やはり、《anima》と同じ《souffle》（息）に外なりません。

今度は、聖書との関連から、ヘブライ語とギリシャ語の対応を見てみましょ

う。「聖書辞典」(日本基督教団) によれば、新約も旧約も同じく二種類あって、ヘブライ語の「ルーアク」は「魂」よりも「霊」の訳が多く、もう一つの「ネフェシェ」は「霊」ではなく「魂」と訳されている。これに対応して、ギリシャ語の「プネウマ」(pneuma) は殆ど「霊」の訳で、「プシュケー」の方は殆ど「魂」となっている。そこから、人間の精神の面を神との関係において考える時は「霊」と呼び、人間自体においてだけ考える時は「魂」と呼んで区別している、ということです。

以上からして、「魂」といい「霊」といい、その大本は同じであって、それが「息」を意味するのは、根源の「神の霊」の、「創造の息吹き」から生まれたためであるのは明らかでしょう。「息」は「生き」で、いわゆる空気ではなく、「生命のエネルギー」(プラーナ) のことです。

A氏 — では、日本語の「魂」の語源は何ですか。

筆者 — これには諸説あるようですが、「たましい」は、「たま」(魂、霊) とも言います。そして、この「たま」は、「玉、珠、球」でしょう。一般に、美しいものや貴重なものを「たま」と言いますね。そして、「し」は「之」で、「い」は「ひ」(霊) でしょう。つまり「玉の霊」であり、それは「玉なす神のエネルギー」を表わしているのです。それが目に見える形となったもの、それが「原子」であり、様々な「生命体」であり、「地球」であり、「太陽系」であり、二百億の太陽系が集まった「銀河系」であり、それが集まった「銀河集団」であり、更にそれが集まった全体が「大宇宙」という「たま」であるとお考え下さい。先ほどの「ひふみ神示」は、原文は漢数字と記号だけで記された暗号文ですが、「丸」印の中心に「点」を一つ書いて (⊙)、「神」を表わしています。また、王仁三郎の「霊界物語」では、神々が、上位の神から授けられた「神珠」(大いなる奇蹟を行う力を持つ) を奪い合う争奪戦がくり広げられますが、この「珠」が「神のエネルギー」を象徴するものであることは明らかでしょう。そのような「神のエネルギー」が、「創造の息吹き」によって人間の体の中に入ったもの。それが「魂」です。《Jéhovah Dieu forma l'homme de la poussière de sol et souffla dans ses narines le souffle de vie》:『エホバ神』は土で人間を形づくり、その鼻に命の息を吹き込みぬ」(創世記、二章七節)。

A氏 — その「神」がまた、「魂」以上に分かりにくいのです。

B氏 — だいたい普通の人は、日常「かみ」の「か」の字も口にしないでしょ。そんなことを言ったら、変な奴だと思われるんじゃないかな。中には、「神」どころか「精神」と聞いただけで、「じんましん」が出るほどの「肉体派」もいるからね。彼らならば、これほど沢山の「カミ」があったら、「チリ

紙交換」に出そうかと言うかも知れない。

筆者 — Bさんのおっしゃりたいことは、「神」に人間の不始末の「尻ぬぐい」をしてもらいたいということですか。

A氏 — (笑いながら) まあ普通はせいぜい、志賀直哉の「小僧の神様」のような使い方をする程度かしら。

筆者 — でも本当は、「神」とは何かは、人間にとって「死」と同様に最大の問題なのですよ。先ほどのアランは、恩師ラニョーが高校の哲学の授業で、「『神』の存在を確信しない限り、何も確信できないことの証明」という題で、生徒に作文させたことを回想しています (「ラニョーの思い出」)。しかしながら、結論から言いますと、人間には究極の「神」を定義することはできません。その理解能力を、はるかに越えているからです。ですから「魂」と同じく、喩えで表現するしかない訳ですが、それが誰でも知っている「群盲象をなでる図」に外なりません。言うまでもなく、キリスト教徒が考える「白髪の老人」などは実在しませんし、一方の「無神論者」も、自分が理解できる形の「神」を思い描いて、そんなものは存在しないと断言しているに過ぎないのです。結局の所、「神」の本体は、目に見える形のものではありません。

この究極の「神」については、前回の論で例の「黙示録」の、《Je suis l' Alpha et l' Oméga》:「我は『アルファ』 (最初) にして『オメガ』(最後) なり」を取りあげた時、このようにコメントしました。「要するに、それはすべての究極の原因なのです。その『絶対意識』が無限の時の中で『自分』を知ろうと思い続けて、その『思い』は個有の振動の響き、つまり『言葉』となりました。」これが即ち、「言魂」の本源です。そして、様々な物はすべて、その言葉の周波数の違いから生まれました。つまり、「神」の「思い」(イデア) であるエネルギーは、「言葉」(ロゴス) という波動となって広がりますが、最初の高い周波数が落ちると、波動と粒子が一緒になったもの、すなわち「光」となります。そして、そこから更に周波数が落ちると、粒子だけの、いわゆる「物質」になる訳です。この物質世界には様々な物が存在しますが、それはすべて同じエネルギーの、周波数の違いでしかありません。そこで、前回ご紹介した「クリスタルの階梯」では、こう説明しています。「まず光の源があります。その光の源はそれ自身の各種の創造活動に焦点を合わせ、創造の働きを担うさまざまな階層を経て、三次元である物質世界の創造にいたるまでくりかえしその焦点を絞り、純化しつづけるのです。したがって真実を言えば、この物質世界は光のエネルギーが凝固されて固体になった世界なのです。この光のエネルギーとは宇宙の源であったのとまったく同じエネルギーです。それは創造主である神のエネルギーなのです。もしかしたらあなた方は固体である

地球とか椅子の上に座っていると思っているかもしれません。でも、本当はあなた方が座っているのは光の上なのです。あなた方もみな光そのものなのです。すべては光です。」それは、先ず「光の源」である「根源神」がいて、その下に「創造の働きを担うさまざまな階層」の「神々」がいるということですが、これが「一神」と「多神」の関係であることは申し上げるまでもないでしょう。

5 「魂」の旅

筆者 ― ここから、「ホップ」の次の「ステップ」へ入りましょう。先ほど見たように、モンテーニュは「レモン・スボン擁護」の中でギリシャ・ローマの哲学を異教として批判しており、その中には勿論プラトンやソクラテスも入るのですが、実は彼が「エセー」の中で一番言及している人が、このプラトンとソクラテスなのです。特にソクラテスについては、人間の中で一番尊敬する人物で、あまりに立派なので真似する気も起こらないほどだと言っています。イエスは別格（神）になる訳ですが、このソクラテスに、三番目の案内人になってもらいましょう。

ソクラテスが紀元前三九九年に刑死したことはよく知られていますが、その裁判で判決を受けた時、ちょうどアテネの重要な神事が始まって、「その期間中は、公共の名において何びとも死刑に処してはならない」ことになっていたために、彼はその一ヶ月を獄中で過ごすことになりました。そして、いよいよ一ヶ月後のその日になって、彼を慕う大勢の人が集まりましたが、その中の常連の一人であったパイドンが、後に遠方の知人に請われて、ソクラテスの最後の一日を語って聞かせました。それが、プラトンの最初の四部作の最後を飾る「パイドン」であって、その名（副題）も「魂について」です。人といい、場所といい、時といい、これほど「魂」を語るに応しく、三拍子そろった状況はまたとないでしょう。

A氏 ― ソクラテスは、なぜ死ぬことになったのですか。私も文系なのですが、哲学はどうも弱くて。

筆者 ― 一番よいのは直接「ソクラテスの弁明」を読んでいただくことですが、要するに当時の支配者たちに警戒されて、彼らが愚かな青年に中傷の訴えを起こさせたためです。従って、裁判自体はまことに下らないものですが、問題は、事がどれほど明白であっても、五百人の裁判官が二百十票の差で死刑の判決を下したことでしょう。つまり、本当の理由は、彼が「聖者」であったから殺されたのであって、これはイエスの場合と全く同じなのです。この惑星で

は、「聖者」は殺される危険が大であると言わねばなりません。

A氏 ― そのような「聖者」とは、一体何者なのでしょうか。

筆者 ― これも以前に述べたことですが、「聖希天、賢希聖、士希賢」(「近思録」) と言われるように、「男の中の男 (士) があこがれる人が賢者であり、その賢者は聖者にあこがれて、最後の聖者とは、天にあこがれる者」なのです (L' Interprétation des *Illuminations* IV,「文芸と思想」53号)。そして彼らは、本当は人類の進歩のために、「天」から送り込まれた人たちなのでした。その代表者であるイエスは、一体何の罪で訴えられたのでしょうか。それが何と、「瀆神罪」だったのです。あらゆる人間の中で最も敬虔なイエスが、事もあろうに「瀆神罪」で訴えられたのです。そして、ソクラテスが訴えられた理由も、やはり「不敬虔の罪」なのでした。彼もまた、もっとも敬虔な一人だったのではないでしょうか。時代は下って、中世末期の一四三一年に、ジャンヌ・ダルクが火刑に処せられました。彼女もまた「異端の罪」を着せられたのですが、やはり最も敬虔な人だったことは間違いありません。その他、数えきれぬほどの聖者が殺されていますが、一体なぜなのでしょうか。人畜無害の彼らが、まるで毒蛇のように恐れられるのです。しかしながら、考えてみれば、その恐れは当然のものと言えるかも知れません。何故ならば、彼ら聖人の正体は、「神」が送った「殺し屋」に外ならないからです。つまり、肉体人間の「エゴ」(自己) を殺す、「エゴ・キラー」なのです。そこで、先手をとって先に殺してしまう訳ですが、それによって結局は、自分自身の「内なる聖者」を殺していることに気づいていません。

今度は、国の「支配者」(国王や大統領) の場合を見てみましょう。彼らはいわゆる「聖者」ではありませんが、中には理想の高い人もいます。そのため、例えば先ほどのアンリ四世やリンカーンのように、彼らもまた暗殺されることになり、類似の例は枚挙にいとまがないでしょう。ケネディーの場合などは、白昼堂々とパレードのさ中に狙撃されて、犯人とされた者も殺されたばかりか、証人もまたすべて消されるか変死という有様です。正に「自由主義」の国是に恥じず、「女神」も泣いて喜んでいるでしょう。このように、理想の政治は、「エゴ」を直接おびやかすのです。

そこで、公的に活動すれば幾つ命があっても足りないことを知っていたソクラテスは、私人として人々に話しかけたのですが……。しかし、彼は最初からすべてを見通していたようですね。ある意味では自殺ではないかと思えるほど、まっすぐに突き進みました。先ほどの「パイドン」の最初の所で、語り手のパイドンが、知人にこう伝えています。《Ce qui est sûr, c'est que, pour ma part, j'éprouvai, pendant que je me trouvais auprès de lui, d'étranges

émotions. Non, en effet, en face de la mort d'un homme dont j'étais le familier, ce n'est pas de la pitié qui me venait ; car c'était un homme heureux qui se présentait à moi, tant par son attitude que par son langage; si grandes étaient, en face de la mort, sa sérénité et sa vaillance !》(Pléiade)：「確かなことは、こと私に関する限り、あの方（ソクラテス）のそばにいた間、不思議な感動を覚えたということです。そうなのです、私が親しくしてもらった方の死に臨んで、私の心に起きたのは、実際あわれみの気持ちなどではありません。と言うのも、私の目の前にいたのは、その態度からも言葉からも幸せな人だったのですから。死に臨む、その落ち着いた勇敢な様は、何と偉大だったことでしょう」(58E)。

B氏 ― しかし、ソクラテスとかプラトンの言うことは、要するに奴隷制の上にあぐらをかいた、貴族の哲学にすぎなかったのではないかな。昔、何かで読んだと思うけど。

筆者 ― 確かに、一部の左翼思想家が、そのようなことを言ったことがあります。しかし、今の「差別反対」の眼で当時を見ても、本当のことは分からないのではないですか。そもそも、「奴隷」とは何でしょうか。昔は戦争の時に生きたまま敵に捕らえられることは、戦士として何よりも恥ずべきこととされ、そのような者は人間とは見なされませんでした。即ち、どのような処遇をうけても仕方のない「奴隷」の始まりです。彼らは殺されなかっただけでも、寛大な扱いを受けたと言えるのではないでしょうか。それに比べて、現代の二十世紀半ば近く（1937年)、ある国の軍隊は相手国の「何」とかいう「みやこ」(京）を占領した時、泣いて許しを乞う親の前で娘たちをレイプし、一方で何十万という軍民（兵士と民間人）の「大屠殺」を行いました。そして、その死体を河に投げ入れたため、大河が赤く染まったと言います。彼らは、投降した戦士を奴隷にするよりも、人道的だったのでしょうか。そうです、彼らは正しく人道的だったのです。何しろ、「差別」せずに、「無差別」に殺戮したのですから。正義感の強いBさんとしては……

B氏 ― うーん、みんな死刑だね。いや、そうじゃなくて、上の者が悪い。一番上の者に、すべての責任がある。だから「革命」が必要なのであって、「史的唯物論」はそのための指導原理ですよ。モンテーニュみたいに、権力者と結託して陰謀を計るような、保守反動の「エリマキトカゲ」(貴族）などに何が分かりますか。この際言わせてもらえば、彼は死ぬのが恐くて、神信心に走っただけじゃないですか。そこへ行くと、唯物論者は死など少しも恐れませんからね。

筆者 ― そういうのを、「引かれ者の小唄」(刑場に引かれる者が鼻歌をう

たって見せること）とも言うのですがね。

B氏 ―（A氏に）どういうこと。

A氏 ―（笑いをかみ殺して）さあ、何かしら。

B氏 ―（ムッとして）だいたいソクラテスだって大して変わらないと思うよ。昔「ソフィスト」といって、詭弁で人をだます術を教える商売があったそうだけど、その親玉だったんじゃないの。彼はその術を駆使して善良な青少年をたぶらかしただけでなく、怪しげな「大門教」（ダイモン）なる宗教まででっち上げて世間を騒がせたのだから、訴えられて裁判にかけられても当然でしょ。

筆者 ―Bさんは、まるで当時のアテネの人たちみたいなことを言いますね。では、私もこの際言わせてもらいますが、左翼系の方はプラトンを批判しただけでなく、イエスについても「ブルジョワ的ヒューマニズム」というレッテルを貼っています。もしそれがイエスの「愛」を指しているのであれば、少しばかり見当はずれではないですか。

B氏 ―いや、「ブルジョワ的ヒューマニズム」でさえ、「温情的」発言だと思うね。何しろ彼は、貧乏人相手にバテレンの妖術を使って、得体の知れぬ「病気なおし」をし、人気が出ると、今度は「我こそは救世主なり」などと吹聴して天下を取ろうとしたのだから、これまた死刑も当然でしょ。

筆者 ―Bさんの志操（思想）堅固な所は表彰ものですね。世界中が「日和って」しまった中で、ご立派と言う外ありません。しかし、そのような批判は、はたして本来の「偶像破壊」なのでしょうか。更に進めば、あるいは「光栄兵」になるかもしれません。様々な「大虐殺」は、だいたい十代の若者が中心になっていることが指摘されています。若くて純粋なだけに、簡単に洗脳されて、理想を実現する「光栄」に酔いしれるのではないでしょうか。

この辺にして「パイドン」に戻りますと、当のソクラテスは回りの人たちに向かって、こう話し始めました。《sans doute en effet est-il, et même au plus haut degré bienséant à qui va partir en voyage là-bas, de faire sur son voyage, son lointain voyage, une enquête et de donner, mythiquement, une image de ce que celui-ci peut bien être : à quoi d'autre, en effet, pourrait-on même occuper son temps jusqu'au coucher du soleil ?》：「多分、かなたへ旅立つ者には、実際この上なく応しいことになるだろう。自分の、その遥かな旅を調査して、それが正にどのようなものであり得るかを、神話のように再現することはね。実際、日没までの時間を、いったい他の何をして過ごしたらよいのだろうか。」この「日没」が毒杯をあおぐ時であるのは、言うまでもありません。彼は次いで、本当の哲学者は平然と死ぬものだが自殺は神意にもとるこ

とを説明してから、なぜ自分が普通の人のように嘆かないかを明らかにします。《si moi, je ne croyais pas devoir arriver, d'abord auprès d'autres Dieux, aussi sages que bons, puis aussi auprès de défunts qui valent mieux que les hommes d'ici, il y aurait de ma part injustice à ne point m'irriter contre la mort !》「もし私が、先ず別の（この世とは違う）賢明にして善良なる神々の所へ行って、次いでこの世の人よりも優れている故人の所へも行くに違いないと思っていなかったならば、私が死に対して腹を立てないのは不公平になるだろう」(63B)。しかも、彼は他の人のように嘆かないどころか、期待しているのだと、こう付け加えるのです。《j'ai tout au contraire bon espoir que pour les défunts il y a quelque chose, et que ce quelque chose, ainsi du reste que le dit une tradition qui remonte loin, est de beaucoup meilleur pour les bons que pour les méchants !》：「私は正反対に、死んだ者には何かが待っていて、それは昔からの言い伝えでも言われているように、善人には悪人よりもずっと良いものであると期待しているのだ」(63C)。そして、以下において、何故そう思うかを具体的に、例の「問答法」（ディアレクティケー）スタイルで展開して行きますが、要約は難しく、かなり長くなりそうですから、ここは直接ご覧になって下さい。ただ、その中心となる考え方については、少し説明しておきましょう。その一つは、プラトン哲学の要をなす「イデア論」です。現代の英語の《idea》や仏語の《idée》（イデー）は、「観念」や「概念」の意味で用いられますが、元のギリシャ語の《idea》（イデア）は《idein》（見ること）から生じて、それは更に《eido》（見る）から来ており、そこから「見られたもの」、即ち《aspect extérieur, apparence, forme》(Bailly)：「外観、外見、形」となりました。ところで、《philosophia》（哲学）とは、誰でも知っているように《sophia》（知、知恵）を《philo》（愛する）ことですから、本物の哲学者とは、感覚によって欺かれた「外見」の「知」ではなく、本物の、不変の「知」を探し求める人を指します。そこから、哲学者は肉体を退け、純粋な観念を求めることが分かるでしょう。

そこで、次のような「問答」が行われることになりました。《Et maintenant, Simmias, que dirons-nous de ce que voici ? Affirmons-nous qu'il existe quelque chose qui est juste, rien que juste ? ou bien le nions-nous ? —— Par Zeus ! bien sûr, nous l'affirmons !》：「ではシミアス（ソクラテスを取りまく若者の一人）よ、今度は次のことについて、我々は何と言うだろうか。我々は何か正しい、ただ正しいだけのものが存在することを肯定するだろうか。それとも否定するだろうか。——『神ゼウス』にかけて、もちろん肯定しますよ」(65D)。次いでソクラテスは、類似の様々な例をあげて、それは眼で見たの

ではないことを確認してから、こう尋ねます。《Est-ce par le moyen du corps que se contemple ce qu'il y a en elles de plus vrai ? Ou plutôt n'en est-il pas comme ceci ? Celui d'entre nous qui se sera, au plus haut point et le plus exactement, préparé à penser, tout seul en lui-même, chacun des objets que concerne son examen, n'est-ce pas celui-là qui se sera le plus approché de la connaissance de chacun d'eux ? — Hé oui ! absolument》:「それらのものの中にある一番真実なものを熟視するのは、体を使ってなのであろうか。それよりも、このようなことではないか。自分の吟味の対象のそれぞれを自分一人だけで、この上なく最も正確に考える覚悟をした者が、我々の中でそれらの認識に最も近づいた者なのではないか。——ええ、確かにその通りです」(65E)。そして、人間が肉体を持っているかぎりは、そのような「真実」に達することができないことを様々な例をあげて説明してから、こう結論します。《Eh bien ! c'est, au contraire, pour nous chose prouvée que, si nous devons jamais avoir une pure connaissance de quoi que ce soit, il faut nous séparer de lui, et, avec l'âme en elle-même, contempler les choses en elles-mêmes. C'est à ce moment, semble-t-il, que nous appartiendra ce que nous désirons, ce dont nous déclarons être amoureux : la pensée, c'est-à-dire, tel est le sens de l'argument, quand nous aurons trépassé, mais non pendant que nous vivons !》:「では、何であれ我々が純粋な認識を持つはずだとすれば、逆に肉体から離れて魂自体でもって物自体を熟視しなければならないことが我々に証明されたことになる。我々が望んでいるもの、つまり我々が(いつも)口にしてあこがれている観念が我々のものになるのは、その時であると思われる。議論に従えば、それは即ち我々が他界した時であって、生きている時ではないのである」(66D)。つまり「イデア」は、本来は単に「物の形」だったのですが、ここに来て、それは永遠の「魂」の眼で見た「永遠の形」、即ち「あの世」の「実体」を指す言葉となりました。

B氏 — 誰が何と言おうと、感覚によらない認識なんて有るわけがないじゃないの。プラトンだかソクラテスだか知らないけど、完全に神がかっていて、とても正常とは思えないね。

筆者 — (笑いながら) これはまた、科学者とも思えぬご発言で。人間の感覚を越えたものの存在は、空気や引力を始めとして、よく知られているのではないですか。光では紫外線や赤外線があり、X線もそうですね。音では、人間に聴こえなくとも犬に聴こえる音域があって、「犬笛」が使われている訳です。また肉眼では見えなくとも、顕微鏡を使えば、そこには「ミクロの世界」が出現します。そして、最近の「量子力学」は更に先へ進んで、ついに「霊界」を

解明しはじめました。

B氏 —「量子力学」のような似非（えせ）科学など、まともな科学者は相手にしないよ。不変の真理は「ニュートン力学」と「ダーウィンの進化論」だからね。

筆者 — では、私の方からお尋ねしますが、Bさんは「夢」を見る時、どの眼で見ますか。

B氏 — ……

筆者 —「唯物論」の方に、これをお聞きすると、皆さん不愉快な顔をされて、何も聞かなかったことにしようとします。

B氏 — それはまあ、何ていうか、コンピュータだって不調になることがあるんだから、何か調子が狂ったんじゃないの。

筆者 — いえ、「夢」は体の変調ではなく、正常な現象であるというのが、心理学者の正式な考えです。

B氏 — しかしね、心理学なんて「サイエンス」とは言えないよ。

筆者 — あのですね。《science》はラテン語の《scio》（知る）から出た言葉で、「知識」という意味ですから、知の対象となる分野はすべて《science》(学問、科学）なのです。近年になって、「自然」分野の「学問」が盛んになったために、「自然科学」を略して単に「科学」と読んでいるに過ぎません。

B氏 — 言葉など、どうでもいいんだよ。我々としては、追試で検証可能なものしか「科学」とは呼ばないから、他は皆「カニ・ブク」（カニがブクブクと泡を吹くこと）だということ。

筆者 — ハッハッハ。すべての人は自由ですから、そのような立場もまた認めましょう。

さて、もう一つの重要な考え方が、あの有名な「想起説」で、以上の「イデア論」と抱きあわせになっています。普通は感覚によって学んで、そこから「知識」を得るのだと考えますが、プラトン哲学では何故「知識」が先にあるのでしょうか。ソクラテスが生成は直線ではなく循環であるという考え方に基づいて、生きている者は死者から生まれるのであって、それ故死んだ人の魂は存続していることを説明した時、もう一人の相手のケベス（シミアスの仲間）が、こう付け加えます。《Il en sera de même encore avec ce fameux argument (au cas qu'il soit vrai !) dont tu fais un fréquent usage et d'après lequel, l'instruction n'étant pour nous rien d'autre précisément que remémoration, il est forcé, je pense, que nous ayons appris dans un temps antérieur les choses dont maintenant nous ressouvenons. Or, c'est ce qui est impossible, à moins que notre âme ne soit quelque part, avant de naître

dans l'humaine forme que voici. Par conséquent, de cette façon encore, l'âme a bien l'air d'être chose immortelle》:「あなたがよく用いるあの有名な論証も（それが本当であるならば)、同じでしょう。それによれば、知識というのは、我々にとって正に回想以外の何ものでもないのですから、我々が今思い出すものは以前に学んだのであるということは、当然のことだと思います。ところで、我々の魂が今のこの人間の形体の中に生まれる前にどこかに存在しなければ、以上のことは有りえません。従って、このやり方でも、魂は確かに不死のものであるように見えます」(72E)。ここもまた三段論法になっていて、この大前提は勿論、この世で学んだ「知識」を後に思い出すと言っているのではありません。従って、この「想起説」も「魂の不滅」を証明するものなのです。その詳細は、直接ご覧になって下さい。

B氏 — さっきから言っているけど、要するに、単に言葉だけの問題でしょ。言葉だけなら、誰でも何とでも言えるんだから。

筆者 — なかなか鋭い指摘ですね。それは様々な場合に、多くの人が感じる疑問かも知れません。従って、これには正面から、きちんとお答えしなければならないでしょう。

先ず、「想起説」が何故正しいと言えるかは、分かりやすい例として、新聞の白黒の写真を考えてみて下さい。誰でもそれを見て、ある人物や風景などが写っていると考えますが、実際は濃淡が違うだけの点の集合に過ぎません。では何故、それを人とか景色と見るのか。それは結局、その「形」が自分の中に、最初からあるために外なりません。次に、同じことを、「カラー写真」で考えてみて下さい。事情は全く同じであることが分かるでしょう。今度は更に、この二次元のものを三次元に移します。すると、やはり同じであることが分かるのではないでしょうか。要するに、普通は二次元の影像を「ヴァーチャル・リアリティー」(仮想現実) と呼んでいますが、実はこの三次元の現実世界もまた、同じ「ヴァーチャル・リアリティー」なのです。それを映し出す映写機が、肉体の「感覚」であることは、容易にお分かりいただけるでしょう。では、その「フィルム」はどこにあるのか。それは当然、映写機 (肉体) の「中」にありますが、映写機とは別物なのです。これは極めて大事なことですから、よく考えてみて下さい。

それから、「単に言葉だけの問題」についてですが、人の言葉は、単なる符号で算数の計算のようなものなのではありません。そうではなくて、芸術作品のような、内なる命のエネルギーの創造的表現とお考え下さい。そこで、問題は受け手の側にあることになります。つまり、ある種の、自分が体験していないことについては、子供が大人の恋愛を知らないように、他人 (大人) の言っ

たことが理解できないということです。いま恋愛に喩えたのは「魂の目覚め」のことですが、例として、デカルトの有名な「コギト・エルゴ・スム」(cogito ergo sum) を取りあげてみましょう。誰でも知っている「我思う故に我あり」ですが、普通は、行動のさ中に自己の存在を実感して、その時「我あり」と思うものなのです。従って、そのような人が「我思う故に」などと聞けば、何か言葉だけの逆説か、洒落のように思うのではないでしょうか。ところが、これは「自分は魂である」ことに気づいたということを、言葉で表現したものだったのです。それは、人の一生で最大の出来事と言えるほどの、大事件なのです。その時のデカルトが「これは大変なことになった」と思ったことが、「方法叙説」などを注意ぶかく読めば、お分かりになるのではないでしょうか。同じようにして、ランボオが自分の「魂の目覚め」を語ったのが、あの「予見者の手紙」です。彼はデカルトの表現をもじって、「我思う」ではなく、「人われを思う」であると駄洒落を言っていますが、この「人」は「魂」のことですから、どちらでも同じであることは明らかでしょう。

この「魂」が目覚めると、なぜ大変なことになるのか。よく男女の「色恋」の場合も、死ぬの生きるのという騒ぎになりますが、それ以上に「命」(肉体生命) をかえりみず、突っ走ることになるのです。その場合よくあるのは、発狂したり、「華厳の滝」に飛び込むケースでしょう。デカルトは慎重な生き方をしましたが、ランボオは、先に見たように二年間で終わりになりました。あまり目立ちませんが、孔子の、「朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」も同じです。特に烈しいのは、禅宗二祖の慧可の場合でしょう。「達磨面壁す。二祖雪に立ち、臂を断って云わく、弟子心未だ安らかならず。乞う師、安心 (あんじん) せしめたまえ」(「無門関」)。昔、私が書いた解説があります。「達磨大師、印度ヨリ支那ヘ渡ル。機イマダ到ラズ、小林寺ニ行ク。ヤガテ面壁黙座スルコト九年。時ニ神光、道ヲ求メテ来訪ス。然シ入室 (にっしつ) ヲ乞ウモ、達磨許サズ。夜ヲ徹シテ雪ノ中ヲ立ツモ、ナオ許サズ。神光、遂ニ自ラノ臂ヲ断チテ差シ出ダス。ココニ入室ヲ許サレ、後ニ二祖トナル」(「不勧読書」)。また、イエスの場合も、その説教は優しい反面、非常に烈しいものがありました。《ne craignez pas ceux qui tuent le corps mais qui ne peuvent tuer l'âme》:「体を殺すも魂は殺せぬ者をば恐るるなかれ」(「マタイ伝」十章二十八節)。これは、明らかに「魂の不滅」を表現したものです。その他にも、《Si donc ton œil droit te fait trébucher, arrache-le et jette-le loin de toi》:「それ故もし汝の右眼が汝を誤らせば、その眼を刳りぬきて遠くへ投げ捨てよ」(同五章二十九節) とか、《si ta main droite te fait trébucher, coupe-la et jette-la loin de toi》:「もし汝の右手が汝を誤らせば、その手を断ちて遠

くへ投げ捨てよ」(同三十節) 等々。これが「ブルジョア的ヒューマニズム」の正体です。

そこで、イエスより前のソクラテスもまた、できるかぎり「肉体」から離れて「魂」の浄化と解放を求める必要を説いたのですが、その本当の理由を、同じ「パイドン」の中でこう述べました。《Eh bien ! voici au moins une chose à laquelle, vous autres, il est juste que vous réfléchissiez : s'il est vrai que l'âme soit immortelle, elle exige certainement que d'elle on ait soin : non pas uniquement en vue de ce temps qu'occupe ce que nous appelons vivre, mais en vue de la totalité du temps ; et, pour qui ne se souciera pas de son âme, ce moment-ci est justement celui où le risque pourrait être jugé redoutable !》:「では、少なくとも次のことは、あなた方がよく考えて然るべきことである。即ち、魂は不滅であることが本当ならば、魂は間違いなく人が自分に気を配ることを求めているのだ、ということは。それは単に、我々が生きると呼ぶことで占められるこの時間(この世の時間)のためだけでなく、時間の全体(あの世も含めたもの)のためである。しかも、自分の魂を心配しない者にとっては、今のこの時は、正に危険が恐るべきものと思われる時なのである」(107B)。つまり、死んだ後に、生前のツケが回ってくるということです。しかしながら、人間は「泥んこ遊び」が大好きなのですね。今や日が暮れて「帰る」時なのに、遊びに夢中になっているので、あたりが暗くなってきたのに気がつかないのです。

B氏 — (A氏に)「ドロンコ遊び」って何。

A氏 — 何か、あまりいいイメージのものじゃないみたい……。

筆者 — 要するに、殺人、強盗、レイプの類のことであって、その集大成が「戦争」と言うことです。ここまで言ってしまうと、ミもフタもなくなりますが。

B氏 — それにしても、何で「ドロンコ」なのかな。

A氏 —「魂」が泥んこになるってことじゃないかしら。

B氏 —「魂」なんて始めから無いのだから、よごれる訳がないじゃないの。

筆者 — 見えないだけですよ。今や、そのよごれを落として「帰る」時なのです。

ところで、ソクラテスと言えば、一般に「無知の知」によって知られていますね。

A氏 — すみませんが、それも説明していただけませんか。

筆者 — 一言で言いますと、自分は何も知らないが、その知らないということは知っている。それに対して、他の人たちは、本当は何も知らないのに、自

分が知っていると思っている、ということです。そこで、ソクラテスの有名な「産婆術」の出番となるのですが、これもついでに説明しておきましょう。彼は、自分が「知」を産めない石女（うまずめ）なので、「産婆」として人が「知」を産むのを助けようと言って、様々な人との「問答」が行われた訳ですが、いずれも「行きづまり」（アポリア）と呼ばれる流産になってしまいます。

そこでですが、一般には、この「無知の知」がソクラテスの本当の姿だと思われています。ところが、それがどうも違うのですね。もし本当に彼が何も知らなかったのであれば、その一生は行き当たりばったりの、何の方針もない生き方であった筈です。ところが実際は、「絶対」の探究によって明確に方向づけられた一生であったことは、先の「パイドン」を見ても、十分に推測できるでしょう。つまり彼は、本当は何か決定的なことを知っていたのではないでしょうか。実は、それを暗示するものが、「パイドン」の中にも垣間見えるのです。例えば、《Aussi bien existe-t-il, là-dessus, une formule qu'on prononce dans les Mystères : *"Nous sommes, nous les humains, dans une espèce de garderie, et on n'a pas le droit de s'en libérer soi-même, ni de s'en évader !"* Je vois la majesté de la formule, et, en même temps, la difficulté de la percer à jour ! Il n'en est pas moins vrai, Cébès, que ceci du moins y est, à mon sens, fort bien exprimé : que ce sont des Dieux, ceux sous la garde de qui nous sommes, et que nous, les humains, nous sommes une partie de ce que possèdent les Dieux》：「実際その点では、『秘義』の中で言われている、ある警句が確かに存在するのだ。即ち、『我々人類は巡回監視区域の中にいて、自分でそこから自由になる権利も、抜け出す権利もない。』私には、その警句の尊厳さが分かる。また同時に、その意味を正確に見抜くのは困難なことも。それでもケベスよ、私の考えでは、少なくとも次のことが非常にはっきりと示されているのは本当なのだ。即ち、我々を監視しているのは『神々』であって、我々人類は、『神々』の所有物の一部だということである」(62B)。先ず「その点」とは、自殺の是非のことです。従って、「自分でそこから自由になる権利」の意味は明らかでしょう。そして、ここで言われていることは、表現こそ古いですが、実は「人類の誕生と進歩」に関する最新の「宇宙情報」とも一致しているのです。それから、ここに出てきた「秘義」という言葉に注目して下さい。ソクラテスは「パイドン」の中でこの用語を何度も使っているのですが、この「秘義」を教えるのが「秘教」（エゾテリスム）と呼ばれるものです。そして、実は「輪廻転生説」とは、この「秘教」の基本の教えだったのです。では、ここから最後の「ジャンプ」に入りますから、思いきり高く遠くへ飛んで下さい（と言って、B氏を見る）。

B氏 ― ……（何も言わず、頭だけが時々うなずく）。

6　エゾテリスム（秘教）

筆者 ― あまり耳慣れない言葉かも知れませんが、この《ésotérisme》（エゾテリスム）は、形容詞の《ésotérique》（元はギリシャ語の esoterikos）から来たもので、《Doctrine ésotérique》（秘義）とは、《doctrine secrète que certains philosophes de l'antiquité ne communiquaient qu'à un petit nombre de leurs disciples》（Littré）：「古代の一部の哲学者が弟子の中の少数の者にしか伝えなかった秘密の教義」のことです。今しがた述べたように、ソクラテスの「問答」は多くの場合が「行きづまり」となって終わるのですが、その時、話が突然飛躍して語られたのが、あの有名な「神話」（ミュートス）と呼ばれるものでした。何か「おとぎ話」みたいなもので、普通は単なる飾りぐらいにしか考えられていないようですが、実は、これが「秘教」の教えや語り伝えであって、ソクラテスの本当の目的は、これを教えることにあったのではないでしょうか。つまり、自分が生涯をかけて本当の「知」を求めつづけても確かなことは何も知り得なかったために、人間が頭でいくら考えても無理であることを教えたのがソクラテスの「産婆術」であって、その時始めて、言葉を越えた「秘義」への道が開かれることになるのです。それは、彼自身が人間的な努力の極みにおいて、人智を越えた「秘義」の意味を悟ったからでしょう。一般に「弁証法」（ディアレクティケー）の元祖のように思われていますが、本当は「神秘家」だったのです。「パイドン」での、死を目前にしたソクラテスは、乳のみ子を抱いた若い妻を始めとして回りの人たちがオロオロする中で、ひとり確信に満ち満ちており、その毅然たる態度の中にも彼らに対する思いやりを見せる姿には、何びとも感動を覚えるに違いありません。そのようなソクラテスとは、いったい何者だったのか。著名なチャネラー（チャネル）の一人、ボブ・フィックス氏は、こう伝えています。「仏陀、マホメッド、イエス、聖母マリア、ソクラテス、シャンカラ、老子、クァン・イン（観音）はこの摂理（マスターが人類の進歩のために教えた摂理のこと）のマスターです。これらのマスターは特別の使命を帯びて地球に転生し、この摂理の真実を人々に明らかにしようとしました」（森晴季訳「アセンション」）。

では改めて、その「摂理」を教える「秘教」とは何かを明らかにして行きましょう。ここでの四番目の案内人は、誰がよいでしょうか。実は、このような見えない世界に関する情報は無数にあって、それぞれが異なっており、どれが本当かは非常に難しいものです。しかしながら、どのような問題にも明確に答

えて、全体的に矛盾がなく、話しぶりも誠実なところから、この役をベンジャミン・クレーム氏にお願いすることにしましょう。現存の英国人画家ですが、知らない方（かた）が多いと思います。彼は特別の「使命」のために、ある「マスター」をチャネリングしていますが、この「マスター」という用語については、前論で、「かつて地球をマスターした者で、今地球の指導に当たっている者」とお伝えしました。先ほどのボブ・フィックス氏はもう少し詳しく、「昇天した大師（アセンディド・マスター）とは、宇宙の教師にして大天使、人々に光を注ぐ霊魂のことです。マスターたちは地球のカルマを昇華し、地球と地球がもつ霊的領域を遙かに越えて、いのちの輝きの源である三正道、すなわち宇宙の叡知と愛と力の次元に昇天しました」と言っています。

そのような「マスター」の一人から指導を受けたクレーム氏が、一九九四年のインタビューで、「秘教」について質問を受けました。「あなた（クレーム氏）が話していることは厳密に言って、宗教の部門ではないようです。哲学と宗教が一緒になったような感じがするので、物事のより広い見方のようなものと考えてよいでしょうか。」そして、それに対して、「そうです。統合する教えです。不朽の智恵の教え、または秘教（エゾテリシズム）と呼ばれているのですが、これは宗教ではありません。また厳密に言って、哲学でもありません。しかし、これらすべての何かを包含しています」、と答えています（石川道子訳「マイトレーヤの使命」第三巻）。また、彼の情報源について、「あなたが提供して下さっているこの情報はどこから来るものですか」と聞かれた時も、「秘教、すなわち不朽の智恵の教えであり、人類自身と同じくらい古いものです。人間の段階を越えて、次の王国、すなわち霊王国に入れられた方々の一団の教えです。彼らは智恵の大師（マスター）方であり、覚者方であり、慈悲の大主方です。彼らは私たちのような人間ですが、その意識を霊的なレベルを包含するまで拡大された方々です」（同書）、と答えたのでした。この「王国」は何かと言うと、地球は最初に「鉱物王国」が存在して、そこから「植物王国」が生まれ、そこから更に「動物王国」が生まれて、そこから生まれたのが「人間王国」ですが、最後にそこから目下「霊王国」へと変わりつつあり、それがいわゆる「地上の楽園」と呼ばれているものだそうです。かねて申し上げている「新しい地球」と同じであることは、明らかでしょう。これらのことは、話せばキリがなくなりますので、詳しくはクレーム氏の著書をご覧下さい。ただ、書名の「マイトレーヤ」のことだけは、ここで説明しておかねばなりません。

日本人ならば、誰でも広隆寺の「弥勒菩薩像」をご存知でしょう。「マイトレーヤ」（Maitreya）はサンスクリット（梵語）であって、「慈氏」と訳され

ますが、これを音写したものが「弥勒」に外なりません。それは今から二千六百年前に、釈迦自身がこう予言した人です。「その時には、兄弟よ、マイトレーヤ（慈悲に満ちる者）と呼ばれる高貴なる者が世に現れる。阿羅漢（アラハット）であり、完全に悟りを開かれた方であり、知恵と正義を備え、幸いなる方であり、世のすべてを知る人であり、人類の手綱を引く無類の御者であり、デーヴァ界（精霊界 ― 筆者注）と人類の両方の教師にして、高貴なる者、私同様の仏陀である（阿含経）」（クレーム著、石川訳「世界大師（マイトレーヤ）と覚者方の降臨」より）。それは、「マスター」たちのリーダーであり、世界が様々な名前で待ち続けた「救世主」その人でした。そして、クレーム氏は、先に述べた「マスター」の指導を受けて、この「マイトレーヤ」が既に現実社会に降臨したことを世に知らせる「使命」を与えられた人なのです。

A氏 ― そんなことを突然言われても困りますよ。誰でも、どう考えてよいか分からないじゃないですか。

筆者 ― 彼は間もなく、単に「教師」の名で公に現れるようですが、信じるか信じないかは、勿論その人の自由です。ですから、自分の眼で直接確かめて下さい。そのために、少しヒントを差し上げましょう。

「三千世界いちどにひらく梅の花」（「大本神諭」）。明治二十五年、後に大本教の開祖となった出口直（なお）に降りた、有名な初発の神勅の冒頭句ですが、その中に、「みろくの世を開いて、もとの昔にかえすぞよ」という言葉があります。「もとの昔」とは、「神代」のことですが、同じ意味の「みろくの世」にご注意下さい。この出口直の娘婿が、同じく教祖の出口王仁三郎（おにさぶろう）でした。その「霊界物語」は、彼のチャネリングを弟子が筆記したものですが、その内容について、神典研究家の中矢伸一氏はこう語っています。「『霊界物語』は、過去・現在・未来を超越し、神・幽・現の三千世界の大改造が、宇宙意志の発動によって、地上世界に神人一体による“みろくの世”、地上天国がどのように完成することになるのか、その経緯と方法論を発表した、前代未聞の経論書であると言われる」（中矢著「日月神示」）。それが同じ「みろくの世」であることは、言うまでもありません。また、例の「ひふみ神示」（日月神示）は、この王仁三郎に降ろされる予定であったのが、あの「宗教弾圧」のために変更されて、彼と縁のあった画家岡本天明になったと言われています。

従って、「ひふみ神示」にも、この言葉が何度も出てくるのです。例えば、「今の肉体、今の想念、今の宗教、今の科学のままでは岩戸はひらけんぞ、今の肉体のままでは、人民生きては行けんぞ。一度は仮死の状態にして魂も肉体も、半分のところは入れかえて、ミロクの世の人民として甦らす仕組、心得な

されよ」とか、「大掃除はげしくなると世界の人民皆、仮死の状態となるのじゃ、掃除終わってから因縁のミタマのみを神がつまみあげて息吹きかえしてミロクの世の人民と致すのぢゃ」とか、「神の国光りて目あけて見れんことになるのざぞ、臣民の身体からも光が出るのざぞ、その光によりてその御役、位、判るのざからミロクの世となりたら何もかもハッキリして嬉し嬉しの世となるのぞ、今の文明なくなるのでないぞ、タマ入れていよいよ光りて来るのぞ、手握りて草木も四ツ足も皆唄うこととなるのぞ」など。

その「ミロクの世」にするためには、今の社会の仕組みを全面的に変えねばなりません。今の社会の仕組みとは何か。言うまでもなく、いまや全世界に広まった極端な「資本主義」（商業至上主義）のことです。最近は「共産主義」国家さえ、経済は「資本主義」化しています。そこでですが、先の大本の初発の神勅（明治二十五年）は、こう言いました。「今の世は金で治まるように思うているが、金の世は滅びのもとであるぞよ。」そして、後の「ひふみ神示」でも、これを受けて同じ警告がくり返し与えられているのです。「金では世は治まらんと申してあるのにまだ金を追うてゐる醜い臣民ばかり、金は世をつぶす本ぞ」、「金は要らぬのざぞ、金いるのは今しばらくぞ、生命は国に捧げても、金は自分のものと頑張っている人間、気の毒出来るぞ、何もかも天地へ引き上げぞと知らしてあること近づいて来たぞ。金カタキの世来たぞ」、「金で世を治めて、金で潰して、地固めしてミロクの世と致すのぢゃ」など。

A氏 ― 先ほどの「仮死の状態」になるというのは、何のことですか。妙に気がかりです。

筆者 ― 最近、事態が好転したので、それほどひどくはならないかも知れません。ここでは、今や科学者も気づき始めた「フォトン・ベルト」（光子帯）がキー・ワードである、とだけ申し上げておきましょう。

では、再びクレーム氏の話に戻りましょう。彼は、マスターの、このような言葉を伝えています。「『ギャンブルのカジノ（賭場）』である世界の株式市場はより高台へと目の眩むような上昇を続けており、その高台から真っ逆さまに大混乱へと転落するのである」、「この混乱の中に、マイトレーヤは踏み入ってこられるだろう。人間は窮地から抜け出るための答えをマイトレーヤに求めるだろう。」そして、これに関連した質問に、次のように答えました。「一九八八年にマイトレーヤは一連の予報を出されました」、「次から次へと彼が予報した出来事が実際に起こりました。」

ここからが肝心な所ですから、よくご注意下さい。「その予報の一つが、世界の株式市場の崩壊が日本から始まるだろう、というものでした。日本の市場は即座に崩壊し始めました。そして現在、日本に関する限り、崩壊してしまっ

ています。日本経済は非常に弱っており、銀行や企業が次々に倒産しています」(石川訳「大いなる接近――人類史上最大の出来事――」)。多くの人は敢えて口にしようとしませんが、日本の負債は信じられぬほど巨額(国と地方で700兆円)のもので、国民一人当たり583万円の借金だとか(高橋乗宣監修「日本国債」)。しかも恐ろしい勢いで増え続けており、これは絶対に払えないのではないでしょうか。株式市場は、まだ最後の形骸だけは止めていますが、完全な崩壊も遠くはないと思われます。そうなれば勿論、世界の多くが運命共同体となるのを避けられませんが、世界の情況によっては、その前の「出現」の可能性もあるようです。

それでは、今の世界は、何故このような事態になったのでしょうか。人間は社会を作って生きていますが、その社会がうまく機能するためには、一人ひとりの間に不公平がないこと、つまり公正さ(正義)が保たれることが何よりも大切になります。不公平こそ、社会のあらゆる不満と怒りの原因であり、温床なのです。では、なぜ不公平が生まれるのか。それは結局、相手に対する思いやり、つまり「愛」がないからなのです。その結果、内部のアンバランスが余りにも大きくなると、社会全体が崩壊することは言うまでもありません。

そこで、世界の現状は一体どうなっているのか、改めて見てみましょう。「先進世界、G8の国々と他の数ヶ国が、世界の食料の四分の三と他の資源の八三%を横領し、浪費しており、そのために発展途上国はその残りでやっていかねばなりません。彼らは世界人口の三分に二以上を占めるにもかかわらず、世界の食料の四分の一とその他の資源の一七%で生活しなければならないのです。その結果、何千万の人々が死にます」(「大いなる接近」)。もう少し詳しく言えば、「世界人口の五分の一、発展途上国にすむ十二億の人々が、公的な(公認の―筆者訳)絶対的貧困の中で生きています。つまり一日一ドル以下で暮らしているということです。彼らは、私たちが当然のことと思っているあらゆるものを奪われて、惨めで悲惨な生活をしています。彼らのうち三千万人以上が文字通り飢えのために死んでいますが、実際この世界に食料の不足はなく、一人当たり大きな余剰が存在するのです。それが開発途上国に住む人々の現実です」(同書)。これについて、訳者の石川氏の補足説明が別書にあります。「マイトレーヤの降臨が、実際予定されていたよりも早く、今、行われたことの理由を一つあげるとすれば、それは毎年何千万人もの人々が飢え死にする世界の現状である。毎分毎分二十八人が飢え死にしており、その内の二十一人は子供たちである。数で比較すれば、広島に落とされた原爆の犠牲者を十数万とすると、広島型原爆を三日に一個ずつ、世界中の都市に一年間落とし続けるのと同じことになる。すなわち飢えと栄養失調のために死ぬ人の一年間の合

計数に近くなるのである」(クレーム伝「いのちの水を運ぶ者」の解説)。

本当は、数の問題ではありません。子供が泣きながら母に空腹を訴える時、何も与えられない母親は、どんな思いをしているのか。そして、腹だけ膨らんで骨と皮だけになった我が子がもはや声も立てなくなった時、母親の乾いた眼は何を見ているのか。また、そのような妻子を見つめる男の暗い眼は、何を思っているのか。GDPの世界一位や二位を誇る人たちは、自分たちが何をしているかを少しは考えてもよいのではないでしょうか。何故ならば、それは他人にあらず、自分自身の姿に外ならないからです。モンテーニュの所で、「一人の人間の中には、すべての人間が入っている」と言いましたね。

A氏 — どういうことか、よく分かりませんが。

筆者 — 先ほど、この現実世界も「ヴァーチャル・リアリティー」だと申し上げましたが、更にその先を言いますと、この「現実世界」は、実は私たちの「心の中」を映す「鏡」なのですね。これは比喩ではなく、正しく「鏡」そのものであるとお考え下さい。物質世界とは、見えない「心の中」を見える形にしたものなのです。例えば、どんな善良な人でも、いやな人の一人や二人はいるものですが、それは、本当は自分の中にありながら自分が否定する部分を映した、自分自身の姿であることに気づいて下さい。自分自身を愛さないと他人を愛せないのは、深い真実なのです。そして、すべてが自分の中にある者とは、要するに「神」そのものに外なりません。人間は正に『神』に似せて創られたのです(「創世記」一章二十七章)。もし、これが本当に理解できれば、地球を卒業する日も近いでしょう。

A氏 — そんなこと、考えられませんよ。相手が、実際に眼の前にいるじゃないですか。逐一こちらに反応しているのは、間違いありません。

筆者 — それは、一方ではすべて相手の問題であって、こちらの問題ではありません。こちらもまた、相手の「鏡」なのですから。すべての人間関係は、このようになっています。

では、卒業して、どこへ行くのか。《D'où venons-nous ? Que sommes-nous ? Où allons-nous ?》:「我ら何処より来たり、何者なりて、何処へ行くや。」画家ゴーガンの、有名な大作の題名です。それは人類の永遠の謎と言われてきましたが、一言で答えれば、人間は「上」(かみ)から来て、「上」(かみ)へ帰るのです。では、なぜ「此処」(ここ)へ来たのか。本来は「神」ですから、始めはすべてを知る存在でしたが、まだ「経験」がありませんでした。そこで、物質世界の「経験」を通して、本当に知ることを望んだのです(D・ウォルシュ著「神との対話」など)。その時に、元の知識があっては、本当の経験ができません。それは、あらかじめ答えを知って試験を受けるのと同

じことですから。それ故、生まれる時に記憶をなくして、王侯貴族から乞食まで、また人殺しから僧侶まで、尼僧から売春婦まで、ありとあらゆる経験を積み重ねてきました。そして今、新たな「段階」を迎えたのです。

これまで、「新しい地球」について何度もお知らせして来ましたが、先ほどのボブ・フィックス氏は、同書でこう説明しています。「地球が太陽系の中では最後にアセンド（次元上昇のこと）のプロセスに向かおうとしています。太陽系の他の惑星は私達を待っています。そして銀河系の他の生命体も私達を待っています。私達は長い連鎖の最後の環であり、私達がアセンドの門を最後に通過するとき、今度は更に大きな門が開き、太陽系全体がアセンドを達成して通過していきます。」かねて、あまり時間がないと申し上げてきましたが、最近ついに、「扉」が閉まりつつあることを知らされました。私のご案内はここまでで、後は皆さんの選択です。以前にお伝えしたように、今回新しい「学校」（みろくの世）へ進学しない方は、別の「学校」（星）へ「転校」することになるでしょう（「星の王子様は語る」）。最後はすべての人が救われるので、その意味では何の心配もないのですがね。でも、「マザー」の命は、いま救われねばなりません。

B氏 ― …ん（眼がさめる）。あれ、まだやってたの。もう「カニ・ブク」は終わりにして、はやく飲みに行こうよ。

筆者 ― 本日は、お二人のご協力に感謝します。そして、すべての方に、「ボン・ボワイヤージュ」（よい船旅でありますように）。

二〇〇二年九月